

状況劇場上演台本

ジャガーの眼

唐十郎

登場する人々

田口

扉

サラマンド

少年

父親

くるみ

しんいち

夏子

看護婦

Dr. 弁

老婦長

住人一（会社員）

住人二

住人三（風呂帰り）

住人四（婆ア）

住人五

住人六

住人七

住人二の主婦

ポーラのセールスマン

一の戸

二の戸

三の戸

四の戸

五の戸
六の戸
七の戸
八の戸

ケーキを囲む他人の影が、ある家の窓に映っている。木の葉の舞う路地で、それを見つめている女が、こう歌う。

ゝあたしは見ていた

あなたの体が

喜びに包まれ

誰かの前に運ばれて

ゆくのを

なごやかな笑を受け

それは

ちよつと微笑んだりもした

私は見ていた

その赤い塊りを

まるで

昇りきらず

郊外の家並にかかる太陽のように


そんな家の一軒で

あなたは

生きて

暮らしていた

第一幕 使者帰らず

路地に立つ一人の男が、一人の住人にリンゴを突き出され
ている。路地の芯とも見えるそこは  型で、端っこに男
の働く会社もある。その会社は、人一人やっと入れるよう
なサンダル型の小屋である。窓もある。サンダルのひもも
ある。それこそ、忘れじの寺山詩人の、失なわれたサンダ
ルなのだ。

カバンを抱えた会社員らしき住人 (リンゴを突き出す)

男(田口) (首を振って)

〱この路地に来て

思い出す

あなたの好きな

ひとつの言葉

住人二 (リンゴを持ってくる)

男(田口) 〱死ぬのは、皆他人

住人三(風呂帰り) (リンゴを差し出す)

田口 〱ならば

住人四(婆ア) (リンゴを差し上げる)

田口 〱生きるのも 皆他人

死ぬのも 皆他人

愛するのも 皆他人

覗くのは 僕ばかり

そこに

見てはいけない何かがあるのか

と歌う中、住人五、六、七とリンゴを押しつけて来る。

住人一〇七 落としたリンゴは、これなのかい？

田口 ちよつと違います。

住人一 何処がちよつとなの。

田口 触った感じが温かく。

住人一〇七 温かく？

田口 頬っぺのように温度があつて。

住人二 焼きリンゴじやあるまいし。

田口 ゆすると中でカラコロとサイコロの回る音もして。

住人三 それ、あんた生リンゴ？

田口 生だと思いません。

住人一〇七 思います？

田口 生です。きつと生です。余りにもつやつやしてて、食べられるのを拒むような。

住人四 息子の仕送りが途絶えましてね。

田口 落としてもへこまず、スもくわず、あたかも。

住人一〇七 あたかも？

田口 何十年と食べられるのを逃れてきた。

住人一〇七 なに！

田口 幸せのリンゴ！

住人二 リンゴに関わってる暇は無いんだよ。

田口 すみません。

住人二 おまえの話に耳を貸すゆとりも無いんだ。

田口 申し訳ありません。

住人二 何なんだい。

田口 え？

住人二 一体何の騒ぎなんだよ。

田口 落としたんです。この路地で。

住人二 おまえ一人がだろ。

田口 一人ですけど、それは、皆、一斉に落としたようなリンゴなんです。

住人二 大音響をあげたのか。

田口 いえ、ただ、コロコロと。

住人二 コロコロとゆくなら素速く拾えばいいだろう。

田口 でも振り返ったんです。

住人二 何かを気にしてお前が？

田口 リンゴが。

住人二 それを言うなら反転しただつ。

田口 その反転したリンゴは、追うな、ここではおまえは追いきれないと。

住人二 熱が入ったな。

田口 ええ。俺は今、コロコロと移動する。そして、追ってはいけない何かを見せる。さあ見ると、顔面から三日分の夕陽を反射させ、目をこすった瞬間消えました。

住人二 おまえは嘘をついてるな。

田口 いえ。

住人二 それじゃ、こうだ、おまえは嘘を楽しんでるんだ。

田口 落としたんです。

住人二 皆さん、その儘でお聞き下さい。こいつは誰かに似ていませんか？

住人一〇七 うん、誰かに似ている。

住人二 その誰かなんじやありませんか。

住人一〇七 その誰かでしょう。

住人二 おまえは誰かだろ！

田口 誰かって誰です。

住人二 誰かの中の誰かだつ。

田口 誰だかはつきり言っして下さい。

住人二 誰だかはつきり言ったら、誰かでなくなるだろう。

住人一〇七 誰かにしとけつ。

田口 きつと、あなた方が思われる誰かだとは思いませんが。

住人二 じゃ、誰かの息がかかった誰かだつ。

田口 誰の事を言ってるんですか。

住人二 この路地を覗いた一人の詩人だつ。

住人一〇七 あれだつ。あいつだつ。

田口 違います、僕は詩人になりそこなつた男です。それに。

住人一〇七 それに？

田口 覗かれた人々の気持ちも分かるし、覗かれた人がどんなに怒るかも承知してます。ただ、突き出すことはなかったけれど……。

住人二 その感想は願ひ下げだよ。

田口 一体、何を覗かれると、そんなに怒るものなのでしょうか。

住人 じゃ、てめえ、覗かれてみろ！

住人一〇七 (囲む)

田口 こうして寄つてたかられると、やはり、あの訴えは取り下げ
てほしい。

住人二 まるで生きている人のように、おまえは言うな。

田口 今すぐでも取り下げて下さい。

住人一〇七 生きているのか？

田口 生きていたら、取り下げますか？

住人一〇七 覗いた男は生きているのか？

田口 生きています。

住人一〇七 どこに。

田口 あの、サンダルに！

とサンダル型の小屋を指す。

田口 昭和五十八年四月二十八日、阿佐谷河北病院に昏睡状態で担
ぎ込まれる。つかけていたサンダルはベッドの脚に揃えられた
が死者を離れて、ある日、忽然と姿を消した。それが、あれが寺
山修司のサンダルだ！

住人 いやみだな。いやみで、きさま。

住人一〇七 ボウチョウさしたな！

と膨らんだ探偵社を指さす。

住人二 やっぱり、いやみな詩人の弟子だったんだ。

田口 僕は詩人じゃありません。一度、詩を送った事があるけれ

それは批評に値しないと突っ返された。それ以来、詩の神にはあ
いそをつかさねたんです。

住人二 それじゃ、いやみだけを受け継いだんだ。

田口 送った詩はいやみなのか詩なのかは分からないけど。

住人二 ここで、詩なんか、披露するなよ。

田口 あの詩はこうだ。「何て、きれいな星だろう」

住人二 誰でも言うな。

田口 「何て汚ないお尻だろう」

住人二 すぐこれ。

田口 「ゴロスケ、ギャツと泣きや、姉さんゲタゲタ、オーワンド
フル、ビューティフル、雨が降る」(頭を抱えて) ああ、耐えら
れない。

住人一〇七 誰でもだつ。

住人二 さあ、もう嘘は楽しむな。

田口 サンドルは見ています。

住人一〇七 (見る)

田口 サンドルは息づいてるんです。

住人一〇七 ……。

田口 その前で言っして下さい。あの訴えは取り下げらるって。

住人二 下げなかつたら。

田口 サンドルともども、この路地の奥まで行きます。

住人二 この路地は、普通の。

住人一〇七 路地だ！

と、つまみ出そうと駆け寄る。その間に、車椅子を押すソ

フト帽の男が割り込む。車椅子には女の人形が座っている

ソフトの男 ここは、私にお任せ下さい。

田口 扉さん。

ソフトの男 二十の扉だ、田口。

住人二 何だ、こいつは。

ソフトの男 二十の扉です、皆さん。

住人 二十が何だ。

ソフトの男 二十を司る男なんです、皆さん。

住人一〇七 二十の意味は。

扉 (高見山になつて) 二重一つ。

住人四 二十一にはならんのかいね。

扉 ご安心下さい、お婆さん。二十で止める男です。

住人四 オトコだなんて……。

扉 どうした、田口。元アジア探偵社のフィリップ・マーロー。

住人二 何か、胡散臭いな。

扉 胡散臭いのはお宅です。お帰り下さい、奥さんがポーラのセー
ルスマンと指ずもうしましたよ。

住人二 (笑って後ずさる)

扉 さあ、皆さん、二十の扉が引き受けました。どうした田口、独
立した一匹狼。

住人一〇七 覗かせるなよ！(と、各々路地に)

扉 覗かせません、二十の扉が立っていますっ。どうした、田口、
扉の中に去った探偵！

田口 扉さん。

扉 分かっている、田口、二十回呼ぶんだろ。

田口 しばらくでした。

扉 答えないぞ、二十回呼ばなければ。

田口 扉さんと、このぐらいにして下さい。

扉 信じないぞ、二十回言わなくちゃ、田口。信じさせもしてやんないぞ。

田口 扉さん。

扉 (人形の頭を持って) サラマンダも元気だよ。

田口 そのようだね、サラマンダ。

扉 お前が去って、一時は気が狂ったように泣いていたんだ。

田口 そうなのかい、サラマンダ。

扉 そうやって一人前扱いしてくれんのはお前だけだったもんな、

さあ田口、二十回呼んでくれなければ、俺もサラマンダの様に動かんぞ。

と止まる。

田口 こうですか扉さん、扉さん、扉、扉、扉……

と呼ぶうちに暗くなる。

田口 (闇の中で) 十九の扉、二十の扉！

パツと明るくなる。立った人形のサラマンダが、車椅子に座った扉を押している。

扉 よくやった、田口、屈託なく話そう。今日、ここに来たのは、おまえに仕事を持って来たんだ。

田口 仕事はあります。

扉 リンゴを追いかける事が仕事か、公園の噴水で腹を満たして、動く探偵社を押してのおまえを、この扉が知らんとでも思うところのか。

田口 たとえ、小さな会社でも、ああして城を持ったからには。

扉 やせがまんするな、フィリップ・マーロー。

田口 仕事は間もなく来るんです。

扉 リンゴを追って仕事が来るのか。

田口 きつと使者が帰る時。

扉 おまえは、タンポポの毛を追って、その方角で仕事を占った事があつたな。使者つたつて、犬か鳩だろ。

田口 いいえ、生まれて初めて持った我が社の秘書です。

扉 秘書を持てる身か？

田口 あの雲が乱れる時、きつと秘書は帰るだろう。

扉 ずい分、立派な秘書みたいな事言つてえ！

田口 その秘書は、リンゴと共に現われました。

扉 きさま、姫リンゴの事言ってるんじゃないだろうな。

田口 いえ、女とリンゴが、静々と、我が社に入つて来ました。

扉 サラマндаよりきれいなもの？

田口 タイプが違う。そして、その秘書は、「私は依頼人だ」と言いました。

扉 それじゃ、秘書ではないじゃないの。

田口 「これから、あなたにある事を依頼する。しかし、あなたにはそれが解けないだろう。だから、私も秘書としてお力を貸す。つまり、依頼人と秘書を兼ね備えて働らかせていただきます」とこう言った。

扉 秘書の給料はどうなんだ。

田口 依頼人から貰い、秘書に払う。

扉 それじゃ、通過するだけだろう。

田口 「動く探偵社がやってゆけるぐらいの金は、自分がつくる。

だから、これから依頼することに専念してほしい」

扉 うむ。

田口 そう言うと、秘書は、リンゴを僕に与え、これを路地に転がしてくれ、そしてその行方に、人の気付かぬことがあったら教えてくれと去りました。次に、仕事を取りに、使者として！

扉 それでは仕事はいらんと言うのか？

田口 せっかくですが、リンゴを探さなきゃなんのです。

扉 依頼はリンゴを探す事なのか。

田口 いえ、それは序の口、すべては、そこから始まると依頼人は言いました。(とつととリンゴを見つけに行く)

扉 それで、俺の仕事は受けぬと言うのか？

田口 扉さん、あなたの思惑は分かっています。何事かの仕事を与えて、ここから去らせたいただけなのでしょう？

扉 確かに、この町内から金を貰って、お前を調べるとは言われている。

田口 でも、リンゴを見つけるまでは去る訳にはゆかんです。

扉 変わったな。フィリップ・マロー。

田口 そう見えますか、二十の扉。

扉 ここで、俺達はたもとを分かつのか？

田口 お世話になったあなただけど。

扉 悲しいぜ、フリリップ・マロー。

田口 そうでしょうか、探偵の見本。

扉 俺が悲しいと言うのは、サラマンダの事を思うからだぜ。

田口 ……。

扉 サラマンダを作ったのは俺だ。そして、サラマンダを動かしたのはおまえだ。

田口 いえ、誰もサラマンダを動かしたのを見た者はいないのです。

扉 そうとも、おまえの頭の中で、動かなければ、サラマンダは動きはしない！

田口 でも、もう動かし切れないんです。

扉 見ろっ、田口っ。

と双眼鏡を渡す。

扉 これを覗いて、もしも、サラマンダが動かなかったらば、俺もあきらめる。俺がいくら動かしただって立つか座るかだ。田口、俺は、今日、確におまえを追い払いに来た。しかし、それと一緒にこの無用のサラマンダを、おまえにゆずるつもりでもいたんだ。

田口。

田口 僕にだって。

扉 無用と言うのか？

田口 ……。

扉 お前は秘書を雇ったから、無用と言うのか？ それならば、余りにもサラマンダがふびんに見えんか？

田口 僕の目の中で、動かなかつたら、あきらめてくれますか？

扉 動くか、動かないか、それはおまえにだって分からんぞ。

田口 ……動かないでくれ。サラマンダ、僕はもう、実用の世界にはあきたんだ。

と双眼鏡を目に持ってゆく。

扉 動け、サラマンダ、フィリップ・マーローを、実用の世界に戻すんだ！

田口 ナムサン！

と双眼鏡を目に当てる。真っ暗になる。

扉 (暗い中で叫ぶ) バカ、蓋したその手を離すんだっ。

田口 それはそこにあることなのか、この脳を覗いているのか？

と手を離す。ゴオツと音して、双眼鏡が開けるように、車

椅子の横に立った人形のサラマンダに明かりが当る。

サラマンダ (顔をあげる)

扉 どうなってるんだ、田口。

田口 動いてません。

サラマンダ (片足を車椅子の肘当てに持ち上げ、ゆっくりとスカ

―トをまくる)

扉 どうなんだ。田口。

田口 ……全然動いてなどおりません。

サラマンダ (片方の乳房を見せ、そこにゆっくりとナイフを近づける)

田口 あっ。

扉 見ているな、きさまっ。

サラマンダ (ナイフを突き立てようとする)

田口 (つい叫ぶ) やめろっ、サラマンダ!

扉 決まった、サラマンダはお前のもんだ!

田口 (片手で、レンズにふたをする) さようなら、サラマンダ。

真っ暗になる。

田口 君を使ったアジ探時代、ラブ・ホテルで、その冷たい肌を抱きながら、尾行した男の浮気相手を調べたこともあったっけ。

扉 まだある。

田口 公園のベンチで、アベックを装いながら、裏取引の現場をカメラに収めた。

扉 もっと言えっ。

田口 カムフラージュだったサラマンダ、使い捨てて悪いけど、僕はもう、覗くだけの探偵にあきたんだ!

明るくなる。サラマンダの人形が車椅子に座っている。

扉 聞いたか、サラマンダ、こいつはもう昔のフィリップ・マール
ーじゃない。

サラマンダ ー。

風、ゴオと路地を吹き抜ける。

扉 分かるか、これは暴君の風だ。

田口 暴君……。

扉 サラマンダの後ろだての暴君が来たんだ。

田口 別名、ネロとも呼ばれた……。

扉 そう言ったのはお前だ、田口、サラマンダにはとてつもない味
方がいる。それは暴君と言う風だと。ビルのガラス拭きが、お前
の抱えたサラマンダを、「ダッチワイフか」とからかった時、髪
逆立てたサラマンダが、一じんの風を呼び、そのガラス拭きを怖
がらせた。その風はきつと暴君と言う名の後ろだてだと、お前は
言ったな。

田口 忘れてません、扉さん。

扉 もっと忘れてならないことを言っやろう。サラマンダの前で
女の名を言うなどお前は耳打ちしたぞ。

田口 ええ。

扉 一言、女の名を言うと、百人の女のしつとで身を焼きこがすと。

田口 つまり、女房にはできないタイプ！

扉 それらは、みな実用の世界に退屈した嘘だったとお前は言うの
か？

田口 ー。

扉 サラマンダを突っ返すならば、その嘘も突っ返せ！

田口 嘘です。

扉 嘘なんだな。

田口 ええ。

扉 暴君も嫉妬も？

田口 そんなものはありはしません。

扉 それで怖くないなら、片腕となった秘書の名を言ってみろ。

田口 言えば……。

扉 その女に迷惑がかかると思ってたのか？

田口 ……。

扉 言えるもんか、お前はまだサラマンダの力を信じてる。サラマンダと働き、いっぱいしにうまい飯を喰えた時の味を忘れてないんだ！

田口 言えます。

扉 言えないって。脱サラの一時しのぎでやってるこんな家内工業
すぐにたたむつもりもどっかにあるんだ！

田口 帰って来る使者の名は。

扉 聞こえないよ。

田口 くるみです！

風吹き、路地に面した家々の壁と窓落ちる。向かい合って
食事をしている家、創価学会の経文を唱えている家、夫婦
げんかをしている家、金魚鉢の中で泳いでいる男の家、空
き家の家などが見える。空き家の家には、チャブ台の上に
ケーキがあり、その上のケーキのローソクがゆれている。

住人二 (夫婦げんかの最中だ。這い出し) こういう覗き方をするのか、てめえはつ。

田口 僕じゃないです。暴君なんです。(と、後退る)

住人二 (カカアとポーラのセールスマンを引きつれて) 暴君？

田口 ネロという風。

住人二 皆さん、こいつは寺山修司以上だぞ。

創価婆ア
平和な家庭 } あのサンダルがある限り。

田口 怨むよ、サラマンダ。(と、去る)

住人二 皆さん、あらゆる生活を止めて、突き出しましょう。

と追う。

扉 ……やはり、くるみか。

ズラズラと扉の使い走りである探偵たち、次々と並ぶ。

扉 俺の後ろに回わるんじゃない。

探偵一 (戸を背負って) 一の戸です。

探偵二 二の戸。

探偵三 三の戸。

扉 まとめて。

探偵四五六七八 (皆、背負った戸をぶつけながら) 四、五、六、七、八の戸っ。

扉 ごくろう、戸に化けた探偵。

探偵一〇八 歌うは、戸の歌、ギーコの歌つ。

扉 女の名は出ないだろうな。女の名が出ると、東北に吹き飛ばぞ！

探偵一〇八 へ扉の陰に誰がいる

それは 不思議なミステリー

ギーコと戸が開きや

ギーコと顔出す

俺たちや ゴーコの探偵だ

悩みの種は

ただひとつ

どこが表だか

内なのか

そこが まるで分からない

ギーツ

扉 おまえたちの中には大学出もいれば、こつそり女房子供を持つてる者もいる。

一の戸 (扉の肩叩く)

二の戸 (ハンカチでパチンコ磨いている)

扉 今の歌で自己嫌悪に陥った者は去れつ。

八の戸 (去る)

扉 ついでサラマングにいたずらした奴も。

七の戸 (去る)

扉 就職情報読んでる奴もつ。

六の戸 (去る)

扉 退場に命かけてる奴はっ。

五の戸 (去る)

扉 去れ、去れっ、歌を誤魔化したのもっ、空間の邪魔になるのもっ。

三、四の戸 (去る)

扉 (二の戸、二の戸に) 何がミステリーだ、この短かい出演こそミステリーだっ。

二の戸 しかし、寺山修司は言いました。出番も無く、楽屋で座っている役者も役者だと。

扉 リリカルなことを言うなっ。

二の戸 ミステリーになりきりますっ。

扉 なんだよ、さつきから。(と、肩を叩く一の戸を振り返る)

一の戸 私、叩いていません。

扉 ミステリーだ。

と叩きつける手を見る。一の戸の顔と片手は戸をくり抜いて出ているが、もう一つの手は義手である。胴と足は戸の向こうにあるのだ。

扉 きさま、字は読めるか。

一の戸 そういうこと言うのと去りますよ。

扉 只の字じゃない、判読に苦しむ字だ、それを俺は手の平に書きつけてある。

一の戸 そういうこと。

扉 おまえ達以外の戸を人払いしたのもこっそり、それを読んでも

らいたいからだ。

サラマンダの前にこぶしを近づける。一の戸の義手、扉の頭を強く叩いている。

扉 これだっ。

一の戸 くるみっ。

暴君、また吹き、一の戸、宙に戸ごと舞い上がって落ちる。

扉 これでこりたか、このやろう。てめえの手ぐらい、始末しろ！

二の戸 しかし、手の平に書きつけた名は、義手撃退の為だけですか？

扉 よく言った二の戸、今夜、集まったのはこの名の為だ。

二の戸 ……。

扉 (口を押さえて) 言うな、二の戸、ベニヤの探偵。この名は、三つの家の壁に、埃をこすって指で書かれた名前であった。

二の戸 確かにそう言われれば……。

扉 だろう？

二の戸 くをしとしか読めなかったけど。

扉 くなんだ。

一の戸 (義手を片手で押さえて出て来て) 誰も住んでいないのに誰かが住んでいると言われた家の壁の字だ。

扉 二軒目は？

二の戸 チョンガーしか住んでないのに。

扉 一の戸許す。

一の戸 (前に来て) 会社から帰って来ると、ごはんが用意されてる。

扉 便利だな。

二の戸 でも薄気味悪く届けがあった。

扉 一の戸に言わせろ。

一の戸 空き巣にしてはごていねいにと壁見ると。

扉 書きなぐったその字は。

一の戸 それ！

二の戸 三軒目は別居した男のアパートで。

扉 一の戸。

二の戸 そんなに一の戸が可愛いんですか！

扉 じゃ、おまえ。

二の戸 夜になって、押し入れ開き、誰かがじっと、自分の寝顔を覗いてる。起きると。

一の戸 温タンポが。

二の戸 この野郎っ。(と、一の戸を撲る)

一の我 何すんだよ、戸を壊して。

二の戸 その湯タンポのどこ、俺、言いたかったんじゃないかよっ。

扉 一緒に言え！

一の戸・二の戸 湯タンポが布団の足のところにあって、久し振りに妻とよりが戻ったような気がした。只、扉を見ると。

扉 怪傑ゾロのように。

一の戸・二の戸 一緒にっ。

扉・一の戸・二の戸 その名が走った。

「誰もいないのに」

「誰かがいる」

「三つの家の」

「ミステリー」

扉 この辺りには住んでもいない者が住んでいる。しかし、もしも

犯人が^{ホシ}いるとしたら、壁にその名を記すだろうか？

二の戸 お得意の推理が始まりましたね。

扉 湯タンポや晩ごはんが用意されてるだけで、訴状が出るか？

二の戸 一つの家は、誰も住んでいないのに、ローソクの影絵となつたコンコンさんの顔が窓に映つた。

扉 いいな、こういう話の進め方。

一の戸 (背中を見せてうなづく)

二の戸 二軒目は、晩ごはんが用意されていながらも、それに手をつけると、相手がいないのに噛む音が聞こえた。

扉 (ポーズとり) それは歯ぎしりとなり、湯タンポを用意された

三軒目の男の横でギリギリと鳴つた。

二の戸 すると歯ぎしりの主は？

扉 戸に化けて何と見た？

二の戸 戸の前に戸をたてた為。

扉 戸にふさがれて見えなかったのか。一の戸は？

一の戸 え？(と、義手を戸に縛って振り返る)

扉 歯ぎしりの主を、どこで見た？

一の戸 わたくし、ホシはポーラのセールスマンかと思つたもんで。

扉 それで、その戸をどこに立てたの。

一の戸 わたくし、戸化してますから。

扉 じゃ、戸に徹底して何を見た？

一の戸 戸です。

扉 戸が戸を見た？

一の戸 アリの渡り戸。

扉 何を言ってるんだ、こいつは！

一の戸 だから、ポーラのセールスマンに奥さんが押し倒されたでしよう。その時、奥さん、パンツはいてなくて、もろに、アリの渡り戸が見えたのね、そこったらね……。

扉 もういい。君らが、そうして、ホシを見過ぎたさなかに、名うての探偵が横行したら、一体どうする？

二の戸 その気配は。

扉 ある。

二の戸 もしかしたら。

一の戸 フィリップ・マーロー。

扉 いや、この名だ。

一の戸・二の戸 く……。(と、口を押さえる)

扉 秘書の名がこれ！ とすれば、ホシと見るよりも、先を越された俺たちへの挑戦状だ！

追い切れなかった住人たちが帰って来る。

住人二 (息切れて) 風で、あの窓壊れたと言うなら。

ポーラと主婦 ハアハア。

住人二 なんて、この探偵社が壊れないんだ。

と、屋根を引っくり返す。

住人二！

平和な家庭（遅れて入って来て）！

婆ア！

同じ型の社が、サンダルの形でつくられている。

住人二 ビックリ箱だ、ビックリ箱で出来てやがる。（と、屋根を

ひっぱがす）

主婦 やめて、あんた、玉ねぎの皮むくような真似はつ。

住人二 うるせえ、中心を確かめるんだ。

むく、机ぐらいのサンダル小屋をひっくり返すと、実物大のサンダルが見える。

婆ア バチが当たるよ、あんた。荒野に去ったサンダルだもの！

住人二 それじゃ、荒野で眠ってろ！

と壁に投げつける。田口、立っている。

扉 行こう。サラマンド。お前のせいじゃない。

愁える人形を押し去る。住人たちも、いくらか、酷いこ

とをした気がして各々の家に去る。窓を戻す。誰もいない
真ん中の家だけに、ケーキが見える。

田口 へ（靴を拾って置き）

この路地に来て思い出す

あなたの好きな

ひとつの言葉

生きるのはみな他人

犬の死骸を抱いた一人の少年 ……おじさん。

田口（靴の上に屋根かける）？

少年 これ、まだ生きるよね。（目を拭く）

田口 泣いているのか？

少年 死んでいるなら。

田口（また屋根かけ）どうした？

少年 車にはねられたんだ。

田口 息は？（と、また屋根かけ）

少年 してないけど、体がまだこんなに温かいんだ。

田口 それが生きるかどうかは、おじさんにも分からんよ。

少年 でも、姉さん生きていると言ってくれたよ。ここに働いてる姉さ

ん、あきらめなければきっと生きている――。

田口 その名は？

少年 くるみと言う。

田口 使者に会ったのかい。

少年 はねられた犬を抱いて泣いていたら。

田口 使者がお前をなぐさめたのかい？

少年 僕はこう言ったんだ。チロ、死ぬな。体がこんなに温かい。チロ、雪の谷を一緒に走ったチロ、お前の心臓を僕のものにしてきつと生かしてやると、皆、物分かりの悪い子だと、犬を引き離しにかかったけど、ここの姉さんだけが、あんたがそう思っているなら、きつと出来ると言ってくれたんだ。

田口 そうか。

少年 出来るよね、おじさん。

田口 それは、おじさんにも分からない。

少年 だって、あのお姉さんの社長だろ。

田口 そうだけど。

少年 お姉さんいないの？

田口 ああ。

少年 じゃ、おじさん、出来ると言ってよ。言ってくれなければ、これ、父さんに取り上げられんだ。

田口 君は犬の魂だけで生きられないのか？

少年 だって魂なんか見えないじゃないかどこにも！

田口 だからと言って、犬の心臓をどうして持つんだ。

少年 死の谷を飛び越えたチロの心臓が欲しいんだよ。

田口 だから、それをどうして生かせる。

少年 僕の心臓と取り変えてでも！

田口 そんな事ができるか？

少年 出来なきや、捨ててしまおうだろう。

田口 しかし、そんなことをしたら、君の心臓はなくなるぞ。

少年 うん。

田口 君の心臓がなくなって、悲しむ者がいないとも思っている

のか？

少年 じゃ、なぜ、お姉さんはあんな事言ったの？

田口 ……。

少年 そんなこと言う大人はいないとうちの者は言うけれど、一人いると僕は言っちゃったんじゃないか！

田口 使者よ、そんなことしてることが使者なのか。

少年 お姉さんがいないなら、おじさん代りに言っておくれよ！

父親 (現われ、離れたまま) ヤスヒロ、帰っておいで。

少年 いやだよ。僕はチロの心臓もらうんだ。

父親 あなたですか、ヤスヒロにそんなこと吹き込んだのは。

田口 いえ。

父親 分かったか、ヤスヒロ、そんなこと言う人は近未来にもいないんだ。

少年 ここのお姉さんだよ。この社長の部下だよ。

父親 あなたはそういう部下をお持ちなんですか。

田口 ……。

父親 もぎ取って下さい。上司として、この子から犬をもぎ取って下さい。

少年 できないよね、おじさん、おじさんがもぎ取ったら、僕もあきらめるよ！

田口 ——。

父親 どうしたんです。何をためらっているんです。

少年 もぎ取ってもいいんだよ、おじさん。

父親 ヤスヒロッ。

田口 犬の心臓をつけた労働者なら分かる。しかし、君は子供だ。

犬の心臓をつけた子供が、お手なんかしたらどうなる？

少年 お手なんかしない、チロは根っからの野犬なんだ。

田口 じゃ、チロの心臓をつけて、どこにゆけんだ。

少年 チロが行きたかったところ。

田口 しかし、いつまでも子供じゃないぞ、体は大きくなる。

少年 それじゃ、将来は犬の心臓をつけた労働者。

田口 そんなものはな、ソ連でしか生きられないんだ。

少年 じゃ、ソ連を変えてやる！

田口 ソ連を変えられるのか！

少年 うん。

田口 ソ連を変えられんなら、俺もゆく！

父親 やめて下さい、話すのはやめて下さい！（と、犬を取り上げようとする）

少年 おじさん。（と、犬を投げる）

田口 ほいさ！（受け取る）

少年 やっぱり味方だ。（田口にすり寄る）

ポーラのセールスマンとトランクを持った主婦出て来る。

後ろには家出される妻を見送る住人二がパジャマ姿でついて来る。

住人二 また、何の騒ぎだ。

父親 子供を労働者にさせると言ってます。

住人二 させりやいいいだろ。

父親 犬の心臓をつけた労働者に。それでソ連に革命を起こすんだ

と。

主婦（セールスマンと手に手を取って）じゃ、あんた。（と、去る）

住人二 あ……。

父親（住人の見送る前に立ち）それで、子供と大人が意気投合してんですつ。

住人二（ギリギリとふるえる）……この二米が賭けだったんだ。

この見送る二米の間に、よりを戻してもいいと思っていたのにい……。 （と、父親を見上げる）俺はあの女の多情が好きだった。たとえ、セールスマンに尻を振っても、いつてらっしゃいの声にしばれてた。（田口を見て）それを犬の話ごときで、よくもチャンスを奪ったな。そうか、おまえは覗きばかりか、家庭崩壊の引き金でもあったのか！（と、治ったサンダル探偵社の屋根を引っくり返す）妻の座をどうするっ。（折りたたみ）妻の座をどうしてくれる。

田口（残った礎石の上でがんばって）やめて下さい、これがあとかたもなくなくなったら、使者の帰るところがなくなってしまうから。

住人二はそれでも田口の座っている資本を引っくり返す。

少年（犬を父親に奪われ、手を引っぱられて引きずられ）おじさん、どうすんだよ、これからどうなんだよ。

田口（這いつくばって見る）

少年（手を伸ばし）僕は只の労働者になるのかよお？

田口 君はひとつだけ忘れていた。犬と人は違うんだ。僕も君も違うんだ。

少年 (去る。奥で泣き声が聞こえる) いやだよお、このままじゃ、いやだよお！

住人二 (は、妻を追って去ったあと)

田口 くるみ、(と、立ち上がる) 何をたきつけたんだ、我が使者。(フラッと前に来て) 泣きじゃくるあの声を聞くぐらいなら、ありもしない慰めはやめにしろ！ それにしても、何をしてるんだ、くるみ？

カスタネットを打つような、くるみを擦り合わせる音が聞こえてくる。そっと、田口の背に一枚の戸が張りつく。

田口 近くにいるな、くるみ。(と、振り返る)

一枚の戸 (地に伏す)

くるみの音 (カリカリと)

田口 今、社は戻す。(と、サンダル小屋をつくろう)

二枚目の戸 (端に現わる)

くるみの音 (止まる)

田口 さあ、来い、くるみ。(と、立つ)

二枚目の戸 (伏す)

田口 いけねえ、リングゴ忘れてる！(と、路地にゆく)

くるみの擦り合わせる音、強く。バラバラッとそれを追うように残る五枚の戸、伏した端の戸とサンダル会社に近い

ところで伏した戸の間に立つ。

田口 見つからないよお、くるみつ。(と、正面向く)

五枚の戸 (一斉に伏す)

その七枚の戸が床になると、一人の会社員、それを踏んでいくらか治ったサンダル探偵社に金の入った封筒を投げ入れる。ところで、八枚ある戸の中で、何故、二の戸が無いかと言うと、首が出ているから、遠慮しているのだ。

田口 何です、この金？

会社員 どうかフィアンセには内緒で……。 (と、去る)

太ったマダム、戸を渡って来て、ワニ皮のハンドバッグ投げる。

田口 何なんです、皆さん。

マダム 分かってるでしょ、あんた。(と去る)

田口 分からない。

杖ついた婆ア、戸を渡って来て、入れ歯を投げる。

田口 やめて下さい、お婆さん。

お婆さん どうぞ、墓移した事は御先祖様には御内分に。(と、去る)

田口 訳の分からない、この騒ぎ。法に触れてないだろうか！

くるみの音、笑うように近づく。

田口 何処に帰って来たんだ、くるみ。

声 ここよ、フライリッパ・マーロー。

路地のつむじ風が、木の葉を舞い上げると、路地の木戸が開いて、壁に寄りかかって片足を向かいの壁に当てた葉巻をくわえるソフトの男装！

くるみ（葉巻を噛んで、片手に握った二個のくるみを擦り合わせる）

カリッ、カリッ、カリリッ！

田口 鏡だ。ありし日の僕の鏡だ！

くるみ 使者、只今、帰る。（と、立ってくるみを当てる）

田口 社員なら、社に戻れっ。

くるみ 戻りたいのは、やまやまだけど、（と、下手隅に立つ）

向かい合う上司とくるみ。

田口 何をためらう、依頼者にして探偵。

くるみ 七つの扉を抜けなければなりません。

田口 七つの扉？

くるみ 一つは猜疑。

一枚の戸 (立つ)

くるみ 二枚は、不意に。

二枚目の戸 (不意に立つ)

くるみ 三枚はそねみ、四枚は自堕落。

三枚・四枚 (立つ)

くるみ 五枚は冷血！ 六枚は非業という名のかがり戸。

五枚・六枚 (立つ)

くるみ そして、最後は、誰もあけられぬ密閉！

田口 回わり道して来い！

くるみ いえ、これを開けて戻ります。我が社に。(と、手前の戸のノブを持つ)

へ一つ開け

二つ開け(と、開けてゆく)

ふと思う

こんな謎

入ったのか

去ったのか

ここまで生きても分からない

三つ抜け

四つ抜け(と、開け、五枚の戸の前で)

振り返る

こんな謎

招かれたのか

畏に落ちたか

ここまで開けても分からない

五つ抜け

六つ押す

誰でも持つてる七の扉！

バンと七つ目を開ける。上司の田口はいない。

くるみ 上司？

田口は、七つ、へだてた反対側に立っている。

田口 こい。

くるみ (立つ七つの戸を振り返って) あたし、抜けたんじゃないのかな？

田口 余り遅いんで、僕の方から回わり道したの

くるみ (上司なのでバカとも言えず) それじゃ、七つの扉を開けてきなさいっ。

田口 それが開けようとしたら、こいつ、四つに組みやがんの。

見ると、戸の人間と相撲をとっている。

くるみ 「かしわ戸」だったら投げられるわよ。

田口 この野郎っ。(と、足かける)

戸 えいっ。(と、投げる)

くるみ これから、あの人に仕えるのだらうか。(と、サンダル探偵社に寄りかかって葉巻に火をつける)

田口 ちくしょうつ。(と、足にかじりつく)

サラマンダの耳を押さえた一の戸を従えて扉現われる。

扉 (くるみを見つめて) もうよせ、二の戸。(と、押さえつけている戸をいさめる)

くるみ (葉巻をくわえて、村松友視のような、馬を見る目付きで扉を見る)

扉 (くるみを見たまま) それで聞いたのか、七つの扉?

一七の戸 (戸を背負ったまま後ろにさがって並び) 確かに。

扉 (くるみにウインクして) それは確かに鳴ったのか、七つの扉。

一七の戸 キリキリと。

くるみ (ウインクし続ける扉に、煙をプツと吹きかける)

扉 歯ぎしりがもしもくるみの音ならば。

一の戸 (キュッとサラマンダの耳をふさぐ)

扉 おまえはホシなのか探偵なのかどっちだ?

くるみ 何のキラ星?

扉 留守の家にごはんを作ったり、人の家に踏み込んで湯タンポ沸かす。

くるみ ホシにして探偵さ。

扉 依頼人にして秘書が、ホシにして探偵になるのか?

田口 ホシ、ホシって、何の事です、扉さん?

扉 田口、お気の毒だが、こいつは星だぜ。

田口 結婚前の男やマダムの浮気を調査して何がホシです？（と、財布や入れ歯を見せる）

扉 それはおマケで、この依頼人にして秘書はな、留守の家に入り込み、くるみとサインするホシなんだっ。

田口 そうなのか、くるみ？

くるみ 上司、私はホシです。

田口 それだけか。

くるみ そして探偵。

田口 つまり、おとり捜査という奴だ。

くるみ ……。

田口 （扉に） そうなんです。

扉 それだけか。（うたぐって）

田口 何も盗っちゃいないんだろう？

くるみ 盗るものは……。

扉 見ろっ。

田口 まだ盗っちゃいないな。

扉 盗るんだ。こいつは空き巣だ、話も落ちたな！

田口 君は人の家に入って何を盗るんだ。

扉 それも三軒！

田口 三軒も入って、金目のものを物色すんのかっ。

扉 恥を知れっ。

田口 何が欲しいんだ。

扉 何をおっぱらおうとしてんだ？

一七の戸 何を？

くるみ （葉巻の火をゆっくり靴で踏み消す） 盗る物は……。

田口 何てこった。

扉 一杯喰ったんだ、お前、利用されたんだ。

くるみ あの目の光。

一七の戸 何！

くるみ ジャガーの眼です！

音楽。

くるみ この辺りには、ジャガーの眼を持った男がいる。生きるのも他人、愛するのも他人、そして死ぬのも他人ならば、その他人の闇夜を抜けて、らんらんと生きるジャガーの眼がある。それは三度生き、これからも生きようとするジャガーの眼。その目の光りに近づくためにホシになり、その在りかを見るために探偵になったあたしを、上司、まだ社員と言ってくれるでしょうか。

田口 くるみ！ その眼はどこだっ。

くるみ その眼に浴されたい。その光にこの体を包ませ、あたしはどんな他人が見せたい。上司、これでも探偵と言えるでしょうか。

田口 大探偵！

くるみ まだ会わぬその眼、その眼に近づくためには娼婦になっても、くるみを鳴らすこんなホシを、上司、突き出しませんか？

田口 ゆけえっ、くるみ！

一の戸の馬鹿が、意識的にサラマンダの耳から手を離す。

暴君吹く。

扉 吹けっ、暴君、このたわごとを吹き散らせ。

七つの扉 (吹きつける風にぶつかったり、踏んづけ合ったりする)

田口 (上手で、隔てて舞う戸をよけ) くるみっ。

くるみ (戸にさえぎられ、背伸びして) 上司。

田口 くるみっ。

くるみ 上司っ。

田口 くるみを鳴らせっ。

くるみ 鳴れっ、知恵の音っ。

と、倒れた戸の上に立ってくるみを鳴らす。反対側の倒れた戸の上に車椅子からサラマンダが立って乗る。髪がなびく。くるみの音と風の音がけんかする。すると、相離れたくるみとサラマンダの乗る戸が、誰に押されるのか、ゆっくりと近づく。

くるみ (くるみを鳴らす)

サラマンダ (向かい合い、髪を逆立てる)

が、戸を引く者によって、スッと離れて両者、上、下に去ってゆく。

田口 どこだ、ホシにして探偵っ。(と追ってゆく)

上手から、眼帯をした一人の男と恋人らしき女が現われる。

夏子 ねえ、夏子とまた夢の中で会える？

しんいち うん。

夏子 会社でも会うのよ。

しんいち 毎日。

夏子 じゃ、夏子と会わなくなるのはいつくるの？

フラッと、くるみ、下手からくる。どうしたのか、くるみ
血相変えて路地に隠れる。

しんいち きっと……。

夏子 夏子いやっ。(と、抱きつく)

しんいち ……じゃ。

夏子 あしたは、あたしを送ってね。

しんいち (うなづく)

夏子 (駆け去る)

しんいち、路地から、部屋のノブを引く。それは、中央の
窓が崩れて、チャブ台のケーキが見える部屋。くるみ、崩
れた窓から、覗く。

しんいち (部屋に入ってケーキを見る)？

くるみ (頭を引っ込める)

しんいち (ローソクのついたケーキの前に座る。急に) うっ。(と

眼帯をしている眼の方を片手で押さえる)

くるみ ……。

しんいち （一気に、ケーキのローソクを吹き消し、ケーキを掴んで崩れた窓から捨てようとする）

くるみ （立ち上がって、その手首を掴む）

しんいち （見る）

くるみ あたしです。ケーキを置いたのはあたしです。

しんいち なぜ。

くるみ 誕生日と聞きまして。

しんいち 誰から。

くるみ 夏子さんから。

しんいち 誕生日は半年先です！

くるみ じゃ、ささやかな結婚祝いと思って受けて下さい。

しんいち 祝ってくれるあなたは？

くるみ 申し遅れました、（と、手をつく）夏子さんの無二の友です。

しんいち 会社の？

くるみ いえ。

しんいち 学校時代の？

くるみ とんでもありません。

しんいち じゃ、どこの。

くるみ 愚劣な頃の。

と見上げる。

しんいち 夏子にそんなことがあったでしょうか。

くるみ (右目の眼帯の方にゆっくり回り) お元気でしたか？

無事にやってこれたでしょうか？

しんいち なんとか。(と、体が右に来た女を追うので回る)

くるみ (自分も回って向かい) もし、よろしかったら、その眼帯を外して下さい。

しんいち 見せる程のもんじゃないありません。

くるみ それじゃ、なぜ、ケーキを見た時、おののいたのでしょ？

しんいち なぜか、しみ……。 (と、押さえて)

くるみ あたしが追って来て、辛いのですか？

しんいち あなたが僕を追うんですか？

くるみ (目が……と言いかけて言えないで、うなだれる) ……あ

そこで夏子さんも待っています。今夜はどこかよそよそしいと。

出来るなら、あたしに、それを確かめてきてほしい。そして、一人で暮らしている時は何を考え、隠した目で何を見るのか、そつと見てくれと。だから、しんいちさん、その眼帯を外して下さい。

しんいち まだ、馴れない目だけですよ。

と、外しにかかる。

くるみ 馴れます、こうして迎えれば。

^ あたしは見ていた

ゆっくりと外し、まぶたに固くつむられた眼が、開きかけてゆく。

くるみ へあなたの体が

喜びに包まれ

誰かの前に

運ばれてゆくのを

私は見ていた

その赤いかたまりを

まるで

昇りきらず

効外の家並にかかる太陽のように

そんな家の一軒で

あなたは

生きて暮らしていた

しんいち (目を開き、くるみを見る) この目がなんですか？

くるみ (その日の前で、ひざ落とし) あたしです。(ワナワナと見

られ) ……あなたと暮らしたくるみです！

しんいち 僕とっ？

くるみ その眼と。

少年、父親に追われて、犬を抱え、くるみに抱きつく。

少年 お姉さん、このチロの心臓生きるよね！

くるみ きっと、あの、移植したジャガーの眼のように！(と、指

さす)

バラバラと扉のひきいる戸の探偵囲む

くるみ (握ったくるみを鳴らし、ジャガーの眼に近づく)

田口 (路地から出て来て) あったよ、リンゴ。(と、差し出す)

暗転

第二幕 不思議のリンゴ

外科病棟につづく扉が、七枚、タテに並んでいる。下手からノブをつかみ開け、くるみが歌うと、上手から、しんいちと夏子が、同じように、一枚、一枚開けてゆく。

くるみ へ一つ開け

二つ開け

ふと思う

こんな謎

入ったのか(と、三枚目を開け)

去ったのか

ここまで生きても分からない(と、四枚目のノブを掴んで止まる)

しんいち (同じく、手でドアを開けかけて止まる)

つまり、くるみとしんいちが戸一枚を隔てている。

夏子 どうしたの、あなた？

しんいち 開けられないんだ。向こうに誰か立ってるような気がして。

夏子 じゃ、あたしが開けるわ。

くるみ (スッと後ろに退る)

しんいち (夏子の手を止める)

夏子 どうして？ これから、その目を買った医者に会うんじゃないの。

くるみが後退ると、その前に、一の戸から開けつづけて辿り着いた看護婦が立つ。

夏子 (戸を開ける)

看護婦 (立っている)

夏子 ね。

看護婦 どうぞ、こちらへ。

戸は薄暗がりの左右に去り、看護婦に連れられたしんいちと夏子も、舞台の奥に。

くるみ (一人残り)

〜三つ抜け

四つ抜け

振り返る

こんな謎

招かれたのか

畏に落ちたか

どこまで開けても分からない（と、花道を歩く）
連れてって。幸せのリンゴ。

と、ポケットから、リンゴを取り出す。噛む。そしてサツと去る。

音楽。診察台の上で、Dr.・弁が七人のインターンに囲まれ犬の切開手術をしている。二幕の始まり、始まり。壁には七つの扉があるところを見ると、インターンは、七人の探偵にも思えるが、ここは七つの扉の中心点である手術室に見える。Dr.・弁のメスさばきも凄く、近くで、父親にかじりついた少年が見ている。Dr.・弁の顔の半分は、鉄で出来ている。その鉄の半面の目はくり抜かれ、もう半分の素顔の目には、ダイヤモンドなどを鑑定する眼鏡までついている。笑う歯は金歯。

少年 どうなの、先生、チロの心臓は生きてるの？

Dr.・弁 脈々と。

少年 それで、これからも生きるの？

Dr.・弁 生かすものがあつたらば。

少年 僕、生かす。

Dr.・弁 只、坊や。

少年 生かしてくれるなら、何でも聞く。

Dr.・弁 この心臓は、ついて来るなど言ってるんだ。

少年 ついて来るな？

Dr.・弁 おまえに、もうついて来るなど。

少年 なぜ？

Dr.・弁 子供には分かん。大人にも分かん。そして神にも分かんが臓器交換には難かつしい問題が多くある！

少年 いやだよ。

Dr.・弁 (インターンに) 縫合！

少年 せっかくお腹を裂いたんじゃないか！(と、傍にあったヤカンを投げる)

Dr.・弁 鉄の顔面にヤカンは当り、顔から熱湯が立ちのぼる。

インターン達 (メスの手を止め) ドク！

Dr.・弁 へなぜ 追っては

いけないのだろうか

フランケンシュタインの言うことにや

そこには

追っていけない

何かがあるから (メスをかざす)

インターン達 へチャンチャ リンコ チャンチャ リンコ (と、メスを打ち合わせる)

Dr.・弁 へなぜ 体は

誰かの体にならない

フランケンシュタインの言うことにや

そこには

壊れるものが

何か

インターン達 へチヤン

Dr. 弁 へあるから

インターン達 そして、犬の心音も止まりました。(と、触っている)

少年 (犬にかじりつき) チロツ。

Dr. 弁 (夕陽の窓に向き) 次っ。

少年 壊れないで。ついてゆくからっ。(と、抱き上げる)

待合室に待っていたしんいちと夏子、カーテンを開けて入って来る。

少年 (去りかけて、振り返る) 先生、去る僕に何か一言ないので

しょうか？

Dr. 弁 (ゆっくり振り返る) ……坊や、これからは、自分だけを

愛すんだ。

少年 (睨んだまま、犬抱き後退る)

夏子 (しんいちに) あなた。

しんいち うん。(と、眼帯を押さえる)

Dr. 弁 (手術用のゴム手袋を脱いで) 症状は？

少年 (駆け去る)

しんいち 三ヶ月ちよつと前、先生に角膜を移植されたんですが。

Dr. 弁 (机に座って、山積みのカルテを探す) 百三日前だな……。

しんいち 夏子、君、言っつて。

夏子 あたしには分からないわ。あなたのものになった眼なんだから。

Dr. 弁 見えない訳じゃないでしょう。

しんいち 見え過ぎるんです。

Dr. 弁 (カルテから顔上げる)

しんいち プラザのホテルの屋上から、とんびよりも早く、アブラアゲを探せるし。

Dr. 弁 アブラアゲが好物ですか？ (と、カルテを覗く)

しんいち 別に。通り過ぎる女のアラも見え。

Dr. 弁 ファイアンセを余り見ないでね。

しんいち 只、寝苦しい夜などは、この目だけが冴え。

Dr. 弁 健康な証拠でしょ。

しんいち 眠っても、この目だけが別な物を見ている様な気がしません。

Dr. 弁 夢は脳が見るんでしょっ。

夏子 しんいちさん、あのこと言って。

しんいち 昨日、ケーキが置かれていたんです。それを見た時、それが僕の誕生日でもないのに、この目ばかりが、「ああ、今日は俺の誕生日だったんだ」と気付きました。

Dr. 弁 目の誕生日？

しんいち この目の前の持ち主だった男の誕生日！

Dr. 弁 それは只の角膜でしょう？

しんいち いえ、この目は誰かを探しています！ 夜毎、うちの周りをうろつく気配もして、この目もらんらんと光ってそれを待っていますすっ。

Dr. 弁 肉体の一部を追う者はなく、追われようとする一部などありやしない!!

しんいち でも、しきりに追ってくるんです。

Dr. 弁 しかし、その目は君のだつ。

しんいち いえ。

Dr. 弁 もう一度言う。君のだつ。

しんいち 夏子、どう思う。

夏子・Dr. 弁・インターン 君のだつ。

しんいち 戻して下さい。先生、在った所に戻して下さい。

Dr. 弁 診察台に座りたまえ。(と、押し、腕をまくって掴み)こ

れは君のだな?

しんいち ええ。

Dr. 弁 (胸を拡げて、つねり) これも君のか?

しんいち (顔を歪める) ハイ。

Dr. 弁 これも君のだ。(と、鼻をつかむ)

しんいち 分かっています。

Dr. 弁 これもだつ。(と、耳引っぱる)

しんいち そうです。

Dr. 弁 これもかっ。

インターン達 (台の上で尻まくって、しんいちの顔につける)

しんいち (尻に圧倒され) いえ。

Dr. 弁 それじゃ、誰のだつ。

インターン達 僕たちのっ。

二の戸 (だけ、逃げ去る)

Dr. 弁 (しんいちに) 区別がついた所で最後に聞く。これは――

インターン達 (六人で寄ってたかって右目の瞳を開く)

Dr. 弁 誰のだ？

しんいち それは。

Dr. 弁 俺のか？

しんいち いえ。

Dr. 弁 お前のかっ。

しんいち 目に聞いて見て下さい。

Dr. 弁 (目をガーゼで突っついて) お前はしんいちのだっ。

しんいち ——。

Dr. 弁 お前はしんいちの目になったんだ。

しんいち ——。

夏子 あなた痛いでしょう。痛かったら、あんたのものよ。

Dr. 弁 (ガーゼで強く突っつき) お前は、しんいち以外の所で生

きられやしないんだっ。

しんいち (涙が出てくる)

Dr. 弁 移殖して百三日！ キリストが荒野を彷徨った日にちをお

前も生きた。

しんいち (頬に垂れる涙を拭こうとする)

Dr. 弁 そして今、おまえはしんいちの目になったんだっ。

しんいち いえ。

Dr. 弁 目の言葉で言え。

しんいち これは今でも、ジャガーの眼ですっ。

驚き、あきれ、サツと、Dr. 弁もインターンも診察台から

飛び下りる。

Dr. 弁 ジャガーの眼とは？

しんいち 僕と他人の谷間を越えた――。

Dr. 弁 それじゃあ、これも！

インターン達 (しんいちの体をつかみ)

Dr. 弁・インターン達 ジャガーの体か？

しんいち 分からないんです。どんだん分からなくなってきました。

Dr. 弁 君は君だぞっ。

しんいち だから、どっかにやって下さいっ。(と、つむったその目に、五本指の爪立てる)

Dr. 弁 (手を掴み止め) 肉体の一部を追う者はなく、追われようとする一部などありやしない。

声 いえ、御高名なるドクター弁。

と、カーテンを開けて扉入って来る。毛布をかぶって、かつらだけが見えるサラマンダの古い車椅子を押している二の戸も。そして、尻を見せずに逃げた一の戸も。

Dr. 弁 サツシのセールスマンに関わってる暇はないっ。

扉 私立探偵扉です。

一の戸 ある時はインターン。

二の戸 わたくし、戸の陰。

Dr. 弁 それが何だ、このアンモニアびんっ。

扉 アンモニアびんではございません。ドクター弁。山羊の体に鉄の心臓を移植され、また、猿の血管にリスの冬眠液を注がれた先

生の御高名を知りながら、誠に僭越ではございますがしやしやり出しました。

Dr. 弁 しやりが出たのか。

扉 僭越ながら。

Dr. 弁 しやりの上にあるネタは？

扉 トロがよろしゅうございますか、それともヒカリ物？

Dr. 弁 失せろっ。

扉 では、申します。まかりこした理由は。

Dr. 弁 なに。

扉 論争。

Dr. 弁 (はじかれたように壁に這いつき) 俺と本気で論争するの
か？

扉 いえ、まるで及びもつきません。

Dr. 弁 じゃ、論争してみる。

扉 では。

Dr. 弁 そこらの大学出と違うんだぞ。

扉 充々。(と、ダンテの考える人のように椅子に片足かける)

Dr. 弁 読書新聞のレベルでやるなよ。

扉 はい、先生。

Dr. 弁 じゃ、来いっ。(と、机の上でシコを踏む)

扉 論争には序破急というものがございます。では、序。

ダダッとインターン達 Dr. 弁の後ろに来る。一の戸、二の

戸、扉の真似して、尻に片足のせ合う。

インターン達・一の戸・二の戸 ペチャクチャ、ペチャクチャ。

(互いに指さし合い)

へ論争論争舌ベロの戦い

なぐり合うより

傷つくぞ

論争論争知識の戦い

負けたらバカの

レッテル貼るぞ

論争論争大論争

しかし

テーマが

何だか分からない

扉 論点は、「肉体の一部を追うものではなく、追われようとする一部もない」とする先生の意見についてですが、ここに異論をさしはさめば、先生、「肉体の一部を追うものも、追われようとする一部もあります」

Dr. 弁 かつて、ナチの収容所で、入れズミをしたユダヤ人の皮膚がランプの傘になった。ゲットー開放の直後、その入れズミに見覚えのあるユダヤ人の肉親が、ランプの傘を抱いて「おまえ、こんななって」と頬すり寄せた。追うとか追われると言うのはこういう場合に通用するが、だからと言って、ランプ傘を追って、肉親は傘になったか？ そして、ランプの傘は「会いたかったよ」と言ったのか？

インターン達 (拍手する)

扉 では先生、追われようとする精子はありますか、追われまいと

する精子はありますか？

Dr. 弁 (机を叩いて) ない！

扉 それならば、人工授精で生まれた子供と母親の住所を、なぜ隠すのですかっ。アンドロイドの子のように、医者はず、世間の目からカクリする？

Dr. 弁 それなら一言で答えられる……ほとぼりがすむまでだ。ほとぼりがすんだアカツキには、精子を提供した親にも会わずし、たとえ、会わないようにしたとしたって、それは、その子が、追われまいとする精子でできた子だからじゃないのだ、このアンモニア野郎っ。

扉 スルリと逃げたつもりでしょうが、この一点に関しては逃がしませんよ。破！

Dr. 弁 何のミソツ歯？

扉 論争の破！

と一の戸の背中にある障子を真ん中に立てる。

Dr. 弁 こんなものを破って、それが破か？

扉 お気に召しませんか、ドクター弁？

Dr. 弁 破るなら、処女、破れっ！ インターン！ 処女を貫き通した老婦長を呼んで来いっ。

インターン そこにいます。

老婦長 (お小水のびん持って) 何か？

Dr. 弁 いい機会だ。言葉の男と寝かしてやる。

老婦長 おやめ下さいまし。

Dr. 弁 いいから寄りかかれっ。

老婦長、障子に、しおらしく寄りかかる。

扉 では、ドクター弁。

Dr. 弁 (婦長に) まだ寝るなっ。

老婦長 (うなづく)

扉 ……臓器交換した肉体の一部に意志、ありや否や？

Dr. 弁 ない！(と、障子に迫る)

扉 (ジワジワと障子に)拒絶反応は？ 赤ん坊に移殖されたヒヒの

心臓が失敗したのは、拒む意志があつたからではないのですか!!

Dr. 弁 ヒヒだぞ！

扉 そのヒヒの心臓が拒んだものは？

Dr. 弁 ヒヒだ。

扉 ヒヒだけじゃ分かりませんっ。

Dr. 弁 何かがヒヒッと笑ったんだ。臓器交換手術に於て、よくヒヒを使うのは、壊れてヒヒと笑うものあり！ その正体を探してるんだ！

扉 それじゃ、山羊のメエメエさんなら、それで、オメオメ生きられんのか!!(と、障子を破って、弁のえり掴む)

Dr. 弁 破ったな。言葉で破らず、手で破ったな。

扉 ドクター弁、リスの冬眠液を猿に打っても、まだ人の体に打てない理由は、それは眠りのゾーンが違うからです。何万年もつかうってきたリスの夢に、人の眠りが入ってゆけないからです。とすれば、あたかも、そこには意志のあるゾーンが待ちかまえてい

ると思えませんか。そして、ドク！ 肉体植民地のドク！ この体に意志のある部分が生き、それを追うものが出て来たら、あなたはどうする！

と、白衣のえりを両手で掴んで、ひっっちゃぶく。

Dr. 弁 （障子を破って反対側に前のめり） そんな事は俺が許さん。

はだけたシャツを、もっと脱ぎ捨てる。

扉 出たっ。

インターン達 肉体植民地！

鉄の仮面ばかりかと思っていたら、白衣の破れた上体の皮膚は縫ぎはぎで、ガラスの片肺、そして、洗濯機のホースが腸の一部として外に出ている。

扉 なぜ、許しませんのか。

Dr. 弁 もしも、俺の体の一部一部をなつかしがる者が、集まり。

扉 ええ。

Dr. 弁 俺の体にしがみついたら。

扉 何です。

Dr. 弁 俺は何だか分からなくなる！

扉 けっこう、ドク。（と、一の戸、二の戸ともども拍手する）

Dr. 弁 お前、立場をあいまいにするなよな。

扉 いえ、意図的な反論でした。

Dr. 弁 お前、犬儒派か。(と、言いながら、寝た婦長を見る)

扉 しかし、ドク、もしも、肉体の一部を追うものがいたらば。

Dr. 弁 (婆さん、さすって) タブーだ。

扉 そのタブーを犯すものがいたらば。

Dr. 弁 婦長、仕事に戻れ。

扉 医学的には罪悪でしょうか。

Dr. 弁 苦痛があれば。

扉 苦痛？(と、しんいちを見る)

一の戸・二の戸 苦痛ね！

Dr. 弁 計りは苦痛だ。

インターン達 物差しは苦痛！

扉 ……その御意見、痛み入ります。では、序でと言っては何ですが、肉体の一部を追うものではなく、追われようとする一部もない事を念頭に、次に、この物体についてお伺いしますが、果たして、この世に人を追う物体がありや否や。(と、毛布を掴んで、サラマンダを見せる)

かつらのみ落ちる。サラマンダはいない。

一の戸 ……。

二の戸 ……。

扉 どうしたの。

一の戸 (折れたひじ当てを掴む)

扉 だから？

二の戸 廊下で急カーブした時ですよ。

扉 サラマランダア！（と、駆け出し去る）

Dr. 弁 物体を追っているのはあいつの方か。

一の戸・二の戸（追う）

看護婦飛び込んで来る。

看護婦 ドク、急患です。

Dr. 弁 急患、きゅうかんで、この病院には九官鳥が飛んでいるのか。（と、インターンと共についてゆく）

夏子 弁先生、しんいちさんは？

Dr. 弁 申し分ないその目を売るなら、買い手はあまたいるんです。（と、去る）

夏子としんいちと、這い上がる婦長のみ。窓から入る夕陽が紫っぽくなる。

老婦長（眼を閉じ）誰の為に、誰の為に処女を守り通したと思っ
てんですか、弁先生。

Dr. 弁の裏の生活が見えてくるが、ここではたいした事ではない。よよと去る。

夏子（夕陽の窓に向かい、しんいちに背を向け）売るのは、しんいちさん？

しんいち うん。(と、診察台に腰かけたまま)

夏子 二人で買ったその眼をよ。

しんいち すまない。

夏子 何もかも、うまくいったのに。(と、しゃがむ)

しんいち 足してもらったお給料、いつか返す。

夏子 お金のことじゃないのよ。売ったあとはどうなるの？

しんいち ……。

夏子 失明覚悟？

しんいち ……僕は誰かを生きられないし、誰かの目は、やはり、

誰かのところに帰らなければならないんだ。

夏子 でもお金を払ったのよ。それで見えるようになったその目のよ。

しんいち ……。(二つのドアから同時に入って来た看護婦をチラッと見る)

看護婦二人、別々の寝台を押しして来る。患者が横たわった

その寝台には、白いシートが額まで冠してある。それを、

しんいちの寝台の後ろに並べて去る。

夏子 (去ったのを確認して) ねえ、なぜ？

しんいち え。

夏子 なぜ、捨てたケーキを、またチャブ台に戻したの？

しんいち ——。

夏子 あたし、あれから、あなたの部屋、見に戻ったのよ。泥だらけのケーキにローソクの火をともしてたあなたを見たわ。あなた

の誕生日でもないのに、どうして、そんなことしてたの？

しんいち 分からない。

夏子 しっかりして、しんいちさん。

しんいち ……もうずい分、飲んでないね、甘酒。

夏子 え？

しんいち お花見に行った時、二人で甘酒飲んだよね。それ、さっき、売店で売ってたんだ。

夏子 (うなずく) それほしいの？

しんいち むしように。

夏子 待ってて、今、買ってくるから。(と、ドアに。そして振り返り) それを飲んだら、もつと気をとりに直してね。(去る)

しんいち 一人。

しんいち (眼帯をかけたまま、窓を見て) ……夕陽が沈む。つかの間、生きたおまえにもそれを見せよう。(と、ゆっくり眼帯を外す) 見えるだろ、これは二十八年間、見て来た平凡な夕陽で、あの赤さは何かの雄叫びではないんだから。

すると、開いた窓から、ほのかに、何枚か、桜の花びらが舞い込んで来る。

しんいち 夕桜。(と、花びらに手を出して、掴もうとする)

シーツの下 (甘酒を出す手が、鼻の前に伸びる)

しんいち ……。(見る)

シーツの下 甘酒です。

しんいち (後退る)

シーツの下 (モコモコと上がって、甘酒持って) 甘茶でカッポレ。

しんいち (シーツのすそ持ち) そう言うあなたは、この目と暮ら

したあなたでしょ。(と、シーツをはぐ)

束ねた髪を落としたくるみが、フィリップ・マーローではなく、藤色のスカートをはいて寝台に座っている。シャツの胸飾りのひもの先には、二個のくるみがぶら下がる。

くるみ 受けて下さい。今日は左目から来たんですから。(と、差

し出す甘酒がふるえる)

しんいち (眼帯をかけ) 会うならこの目に会えばいいでしょう。

僕は今日、この目を売ってしまうんですから。

くるみ (甘酒落とす) ……。

しんいち ——。

くるみ しんいちさん。

しんいち なんです。

くるみ こんな風に尾け。

しんいち ……。

くるみ こういう会い方のあたしがいやなんですか。

しんいち あなたは僕に会う訳ではないでしょうっ。この目に会い

たいだけでしようっ。

くるみ 引き下がります！

しんいち 引き下がれんですかっ。

くるみ 身を引きますっ。

しんいち 身を引けるあなたですか。

くるみ もし苦しいなら。

しんいち ええ。

くるみ こうして、つきまとい、郊外の一軒で生きてるその目を見るのが楽しみのあたしが、うっとうしいなら。

しんいち 普通こんなことないですよっ。

くるみ だから、

しんいち なんです。

くるみ 売らないで下さい。

しんいち 売った方が、あなたの為にもなるでしょう。

くるみ 売った方が？

しんいち 栄養液につけられて、ガラスごしに懐しがればいいじゃないですか。

くるみ 身を引きますっ、身を引きますから、ガラスなんかに入れないでっ。

しんいち どのくらい身を引けるんです。

くるみ 息のしない所に退って。

しんいち 違くから見たりしませんか。

くるみ 電話も通じない所に。

しんいち 偶然会うようなことがあったら。

くるみ そんな事があるでしょうか。

しんいち この大都会で。

くるみ 向こうから来たなと思ったらUターンします。

しんいち 向こうからさえ気付かなかったら。

くるみ 方角を占い、家からも出ず。

しんいち それで、思う事さえ、やめられますか？

くるみ 思う事さえ？

しんいち この眼を！

間。

くるみ (ゆっくりと見上げる)

しんいち 思えば、また追って来るあなたでしょう、思わなければ

これ売るのをやめると約束します。

くるみ 思い……。

しんいち ますか？

くるみ ……ません。

しんいち そこで、これはジャガーの眼でも何でも無い。今から、

僕の、僕が所有する眼になんですよ。

くるみ (向かい、限帯を見上げ) 別れよう、ジャガーの眼。(と片

膝つき) 今年の誕生日を祝うことが出来ても、来年の、そして来年の誕生日に、あたしが来る事はないだろう。誰かの眼からシンジさんの目、そして、今、シンイチさんの眼へと移り住むジャガーの眼、この人なら、きつとうまくいく筈だ。あたしを見つけてようとも思うな。おまえはこの人の中で生きるんだ。そして、夏子さんとも、うまくやれ。たとえば、ショーウィンドウのキーキを見て、元の体に戻ろうなんて思わず、三度目の男の体で生きるんだ。闇で売られてきたジャガーの眼。たとえば、借金の金をあたしが作ってきたって、その眼の戻る所はどこにもない。今になれ

ば、そのジャガーの眼とも呼ばれる眼が、なぜ、売られようとしている事を、ウインクでもいいから知らせてくれなかったか、あたしは悔む。その眼とも、あの人とも暮らしたあたしじゃないか、それが、どうして、あたしに内緒で、借金などのカタになったか、灰になったあの人に聞いても分かりやしない。とある郊外の一軒で生きていたおまえ、そこもまた幸せなら、あたしは去ろう。こゝまで追うだけであたしはよかった。かけつけた病院の一室に寝かされた遺体には、すでに証文どおりに消え去っていたお前。ずい分苦勞して見つけたジャガーの眼だけど、これが、これまでが、にわか仕立ての探偵だった。ちゃんと眼ざめ、ちゃんと眠れ、ジャガーの眼。只、おまえとあの人とあたしで飾った窓ぶちのリング、この幸せのリングばかりが、今じゃどこに置いていいか分からないんだ。(と、ポケットから出したリングをこする)

しんいち (いつか、眼帯を外して見ている)

くるみ (リングを掴み) おじやました。(と、背を向ける)

しんいち 待って下さい。

くるみ でも、夏子さんも参りますから。

しんいち この眼が待ってと言ってるんです。

くるみ (ゆっくりと、振り返り、開かれた眼に気付く) ……。(まぶしくも思える)

しんいち 前の方はシンジさんとおっしゃんですか。

くるみ ええ。

しんいち 亡くなられたのは。

くるみ 交通事故です。

しんいち あなたに連絡もなく、角膜移植されたのは。

くるみ (右目にゆっくりと迫っている) あたし、内妻でしたから。

しんいち 遺体のある病院を知ったのは？

くるみ 三日後で。

しんいち これが、その眼と分かった訳は？

くるみ その日、闇のルートで売られた目は四つ。

しんいち これが、それだと分かったのは？

くるみ 化成ソーダで傷つけた。

しんいち 覗くと見える？ (回わり込む)

くるみ (回わり込む) ジャガーのような、その班紋！

前のめりに睨み合ったまま。問、

しんいち ……もしよかったら、時々、覗きに来てもいいんです。

くるみ ——。

しんいち 遠くとは言わず、一人でいる時など、来られても下さい。

くるみ ——。

しんいち 息のしない所でなんて言わないで、じっと見詰め合って

もいいですから。

くるみ ——。

しんいち 横から、いつも思っても。

くるみ いやですっ。(と、睨んだまま)

しんいち 許すと言ってますよ……。

くるみ 許されたくないんです。(睨んだまま)

圧倒して。

しんいち 何が気に入らないんです？

くるみ どう去ろうと、この眼はあたしのものなんですつ。(睨ん

だまま)

しんいち でも去ってしまうんでしょう？

くるみ あんたが去らせようとするならば。

しんいち 去らせれば胸が痛みます。

くるみ じゃ、どうしてくれんの！

しんいち いて下さい！

くるみ いてどうなる！

しんいち 見ていいですから。好きなように。

くるみ それも眼だけじゃ、いやになってきたんです。

しんいち 好きなように、この眼を扱ってくれと言ってんです。

くるみ その体も好きにさします！

音楽。

しんいち この体とは？

くるみ あんたです！

しんいち ……。

くるみ あたしは、ハナからそのつもりでした。あたしがあんたの
前に立った時、あんたもおびえて気が付いた。これから、どうな
るか分からないと。夏子との事を精算してまで、それをやりきれ
るかどうか、あんたはためらい、それを背負い切れずに、こうし
て病院に来たけれど、あたしが、いつ来るか、どうして来るか待

っていたよね。シンイチさん。あたしは、その目に語っているんじゃないかってよ。その目をはめ込んだあんたの体に言ってるんだ。あたしは、あんたをなびかせます。これは畏じゃない。二十八年の人生で、いつか、あんたが待ち望んでいたとき。誰が身など引くものか。身を引くのは夏子の方さ。

しんいち でも夏子は承知しないでしょう。

くるみ じゃ、張り合ってみりゃいい。

しんいち そうはおっしゃいますが、僕は平凡です。だから、平凡な夏子の相手程度でいいんです。

くるみ それなら、あたしも平凡になりますよ。

しんいち でも僕をどうなびかせるんです。愛するかどうかも分からないこんな僕を、どうなびかせるんです？

くるみ 愛したか愛さなかったかは後の精算。小藪から這い出た薄緑の蛇に心をとられ、それを愛するか愛さないか誰が考えるもんでしょか。蛇がきらいなら、あたしはランプ。あんたの願いをかなえるランプになっても、その体を釘づけにさせてやる。

しんいち 僕はランプを好きになるんですか。

くるみ 机にしまわれていた日記。そこにあんたは書いていた。誰か来る。災いのトランプをめくるように、何かを手の上で転がしながら、いつか、立つと。それがこれです。この世を映すリングです。(と、リングを出し) 災いのトランプはリングになって、

その表面に、これから迎える晴れた日の、夏子のウェディングドレスまで映してる。それが息を吹きかけ、ひと拭きすると、ポロ雑巾になり変わる。誓い合った愛の口元は、生活に疲れてののしり合う歪んだ唇になり果てる。それはリングのせいじゃない。あ

んたの心を映しているから。(リンゴを差し上げ)

しんいち (目をそむける)

くるみ でも、あたしは違う。こうして二人の顔を映すなら、あた

しは何かに似ていない。息を吹きかけひと拭きすると。(拭き、

サツとかざす)

しんいち (見る)

くるみ あたしは、ランプ!

しんいち ? (覗く)

くるみ あんたの願いをかなえるランプに見えない?

しんいち 卵型の。

くるみ 夏子より早く甘酒持って来たよね。

しんいち ええ。

くるみ 願いはもつとあるよね。

しんいち まあ。

くるみ あたし、それかなえられますっ。

しんいち それがかなえられたら、なびくまではゆかないけれど。

くるみ なに。

しんいち 忘れられなくなるでしょう。

くるみ じゃ、病みつきにさせてやる。日に一度拝みたいと思って

るもの、それは――。

しんいち 太陽。

くるみ これですっ。

とシーツの下からビニ本を取り出す。

しんいち (とまどい) ……じゃ、もう一度見たいと思う善福寺川

の、川面に映った去年の入道雲は？

くるみ 日記に書いてた通り、持って来ました。

とシーツの下からサツとビニールのタコ入道を差し出す。

しんいち こんなもの何処にあんです。あの夏の入道雲が。

くるみ 善福寺川の水に聞けっ。(と、ビニールの頭の中に詰めた

川の水を、針の穴つくって吹き出させる)

しんいち (水を払って) それじゃ、青春、あるべきだった青春！

くるみ (こればかりは困って、ビニール落とし) あるべきだっ

た？

しんいち (胸を叩いて) こんなんじゃなく、もっと色鮮やかにあ

った筈の青春。それを見せてくれれば、夏子を捨てて、なびきま

す。

くるみ (リンゴを机に置いて考え、ありったけの知恵をしぼっ

て) それを見せれば。

しんいち 何です。

くるみ あんたはそれになるうとする。

しんいち 遅ればせながら。

くるみ すると、今のあんたは消えるのよ。

しんいち (おびえる)

くるみ でも、言ったからには、もう見なければすまされない。

しんいち ええ。

くるみ できるよ。あんたならできる。(と、退りかねないしんい

ちの袖を持つ）それを見なければ明日だって生きられないんだから。

しんいち ハイ。

くるみ あのリンゴを掴んで。

しんいち （くるみの肩越しに）？

くるみ たとえ、あの皮の上を、あがいて過ぎた青春が走馬燈のよう
うに走っても、有無も言わず掴むのよ。

しんいち 近づくごとにそんなものが見えるんでしようか。

くるみ あるべき青春を掴むなら、あつた通りの青春が邪魔するよ
うに。

しんいち （一歩ゆき）確かに。

くるみ （後ろから覗き込み、しんいちの腰にしがみついて）何が。

しんいち 振られた女の顔までも。

くるみ つづいて振った女の顔もね。そして、起こった青春の嵐は。

しんいち なだらかなんです。

くるみ それじゃ、さざ波！

しんいち 駅前の献血車に血をあげすぎてふらついている僕が見えます。

くるみ あの赤い染みにね。（と、見入る）

しんいち あれです。（と、見入る）あの時、僕は車の後ろで、低

い声の人に会いました。その人はよろける僕を支えて、ついでに魂まで売らないかと言いました。魂なんか売らないと逃げると、

しかし、お前の親は、もう俺に魂を売ったと牛乳びんを二つ取り出し、その中の空気を振って見せました。残るは一家の中でお前だけだ。皆、このつまらない世間に魂売ったんだと言うんです。

その事を家に帰って話すと、親は泣き、血を抜かれ過ぎたせいだ、白内障のせいだと親は泣きました。その光景がようやく見えます。それ以来、僕は、何事もなく過ごしてきたんです。(と、後退る)

くるみ そこを突き抜けっ。(と、押す)

しんいち でも、それからは、町内に来る傘直し、包丁研ぎが、低い声でそそのかすあの男に思え、それから逃げるようにしながらも、いつか、少しずつ、魂を切り売りしてきたようにも思えるんです。

くるみ だからこそ。

しんいち またそれで良かったような気がします。

くるみ (押す)

しんいち あるべき青春なんかに出したら親はもっと泣いたでしょう。だから、そのリング片付けて下さい。

くるみ バカヤロオツ。

しんいち すみません。

くるみ お前、それで男か！

しんいち 何とでも言っして下さい。

くるみ あんたにはジャガーの眼があるじゃないっ。

しんいち (右目を押さえる)

くるみ 三つの人生、生きる眼が。

しんいち 三つの……。

くるみ それはまだ使い慣れていない。その体にはまって、行けどサインが出ていない。それを出すのはあんたよ。シンイチさん。

しんいち (ゆっくり手をどかす)

くるみ この、リンゴとの射程距離を越えて！

しんいち なんか、鮮やかですつ。(右目、右肩を前に)

くるみ そして、吠えてっ。

しんいち ガオーツ。

くるみ ならば、掴むのは今！(と、しんいちの手首を掴んで、リ

ンゴの前に来る)

しんいち 見えるんですね。ジャガーの眼ばかりか、僕までも。

くるみ 一瞬よ。

しんいち まばたく間？

くるみ 形なく、その価値を知る者だけが姿を掴める。

しんいち 触れます。

くるみ (その手首を強く掴み) あたしよ。それを見せたら、なび

くのはあたしよ。そして、あなたの部屋で暮らすのはあたしよ。

しんいち ……。

くるみ 言って。すこやかにあたしを迎えると。

しんいち すこやかに。

くるみ その眼はどこにも売りやしない。

しんいち この眼はどこにも。

くるみ そして、このランプのくるみがいなければ生きられない。

しんいち ランプこそ我が命。

くるみ 掴んで。眼下の果物。

しんいち 迷いなく。

スツとリンゴの乗った机、引かれる。

しんいち 逃げます、あるべき青春。

と追おうとすると、床になにげなく敷かれていた板が、しんいちの前で垂直に立つ。

くるみ また、戸の密偵か。(と、板を踏み倒すが、人はいない)

リンゴを取りにゆく。

しんいち (又立った戸を見ている)

くるみ さ、今度こそ。(と、戻ろうとする)

夏子 (甘酒を持って入って来る) ごめんね、遅くなって。(と、背を向け戸を閉める)

しんいち ああ。(と、くるみの方を見る)

くるみ (リンゴを掴んだまま、なぜか、遠慮して戸の陰に)

夏子 (甘酒さし出し) もっと早く戻ろうと思ったんだけど、待合室の所で、入院しているお子さん達が、節句のお祝いしてんの。

振り袖姿が、そりや可愛くて、つい見とれちゃったら。ねえ、ちよいと見にゆかない？

しんいち 夏子。

夏子 あとで聞く。近所の小学校から、プラスバンドまでくり出してんの。(と、引っぱる)

しんいち (振り返る)

夏子 さ、変な女のこととは考えずっ。(と、連れ去る)

くるみ (戸の陰から出て)

へなぜ 隠れたの

ここまで 来ながら

まともな暮らしを

気づかうのだろうか

とまどう

おまえは

謎（さつと追う）

戸。ゆっくりと元に戻る。不思議な戸だ。花道から、田口と犬を背負った少年がやって来る。

田口 くるみく。

少年 確か、こっちの方から、くるみの触れる音がしたんだけど。

田口 カリカリと？

少年 違う。もつと、ためらう様な。

田口 そんなもんが、どうして聞こえんだよつ。

少年 地獄耳なんだよ、おじさん。僕、こまぐ二枚あるとも言われてんだ、それに、「お前だけを愛すんだ」って言ったあの医者 of 言葉がさ、この診療室から、ワレガネのようにひびいて、ずっと、この部屋、気にしてたし、……おじさん、「お前だけを愛すんだ」って言ったあいつ、どう思う？ あいつも、この部屋も、自己という名の帝国だと思わないかい？

田口 （難しい事は分かんず）くるみく。

少年 それから、おじさん、そのくるみくはないよ。

田口 どうして？

少年 探偵が探偵を追うのに、くるみかよ？

病院に入れるように、田口は、小型にしたサンダル探偵社を引っぱっている。二人とも、花道から診療室に。

少年 あっ。(と、床の上に何かを見つける) やっぱり、ここにいたんだぜ。(と、くるみを一個拾う)

それは、胸飾りの落ちた一個だろう。

少年 (くるみが去ったドアの所で拾ったので) と言うことは、こっちへ抜けたな。(と、ドアを開いてゆく)

田口 (ついてゆこうとする) !

何かに手を掴まれている。

田口 (手首を掴んだものを見る)

二台、ここに運び込まれた寝台の一つ、まだシーツを冠っている中のものが、田口の手を持っている。

田口 サラマンダ、そこに寝ているのはサラマンダかい？
サラマンダ (シーツをはいで、ゆっくりと上体を起こす)

田口 もう、動くなっ。(手を振りほどき、ゆこうとし) 僕は君を捨てたんだ。

サラマンダ ゆくなら、私を壊して行って下さい！

田口 (止まる)

サラマンダ あなたの目の中だけで動けたあたしです。その目から
追い出すならば、あたしをガラクタにして下さい。

田口 その為に、その為に、僕を待っていたのか？

サラマンダ 自由にしていいでしょうか。

田口 お前は……。

サラマンダ 人並に、動いて、喋っていいでしょうか。

田口 ……。

サラマンダ お前じゃありません。その目の中で、屈託なく生きて
いいでしょうか！

田口 いいよ。

サラマンダ (立つ)

田口 ……。

サラマンダ (伸びをして、両手を振り回す)

田口 (行こうとする)

サラマンダ (その背に) よりを戻せとは言いません。心変わりの

何かも分からぬあたしが、あんたを、この冷たい肌に戻そうなど
とは思いません。ただ、あたしは、今でも、あなたの役に立つな
ら爪の先、いえ爪の垢でもいいのです。何か用の足しにさせてほ
しいと、いつも願うサラマンダですから。田口さん。人が追い切
れない物が、この世にはある。例えば、氷河の壁に消えた狼の魂、
それを覗くには、人には出来ない、氷の壁に添い寝してもくたば
らない、冷たい肌の人形なら、それが出来ると言ってくれたあな
たじゃありませんか。あたし、それ今でもやれます。そして、今

あなたにはそれが必要なんです。田口さん、あなたは今、追い切れない何かを追っているんです。それは、あなたも心のどこかで承知しているでしょう。田口さん、お願いします。あたしにそれをやらせて下さい。くるみは、あなたには追い切れません。肉体の一部に恋し、その肉体の一部のみか、その一部を守る為には、器に等しい肉体さえも罠にかけようとするくるみの情熱に、あなたははじき飛ばされる。くるみは今まで会った事もないホシです。

田口 くるみが何をしようと言うんだ！

サラマンダ くるみを追うと不幸になります。

田口 なに？

サラマンダ くるみも不幸を承知です。しかし、それを尻ぬぐいしようにするあんたは、きっと。

田口 言え。

サラマンダ もっと不幸になるでしょう！

田口 告げ口するのか、きさまっ。

少年入って来る。

サラマンダ (ゆっくり倒れる)

田口 くるみが、どんな恋をしていると言うんだっ。

少年 (田口を見る)

田口 そして、どんな他人の体に罠をかけたと言うのか言ってみろっ。

少年 おじさん、見当らないよ。

田口 おまえが、ねたみで風をおこしたのを知ってたんだ。今度は、

やわらかい言葉で、縁を切らせようって言うのか、おい。

少年 おじさん、誰と話してんだよ！

田口 こいつつたらな。

少年 しっかりしてよ、おじさん、人形じゃないか！

ドドツと人々入って来る。

Dr. 弁 (叫ぶ) ドアで囲えっ。

扉のオハコを取って、八人のインターンに、しんいちと、泣いてる夏子を戸で囲わせる。サラマンダを探しに行っている扉はどこに行ったかいないが、八人のインターンの中には、一の戸、二の戸も含まれているかもしれないが、よく見なければ分からない。

79

Dr. 弁 (不埒な者が入らないように戸で囲わせた中に、しんいち

夏子を鑑定しながら) いいですか、もう一度順を追って話しますよ。

夏子 (ハンカチで鼻をおおって) ええ。

Dr. 弁 この苦痛はいつから起こってんですか！ (しんいちを指す)

しんいち (眼帯の右目を押さえている)

夏子 甘酒買って来た時にはこやかだったんですが、節句の祝い見に廊下に出た時、この人、急に、もう一度青春を取り戻しにゆきたいから、今までの事はなかった事にしてくれと。

Dr. 弁 青春！

夏子 あたし達のは青春じゃないのと聞いたたら、もつと嵐のよう
と言うから、あんた、それ一人で考えたことじゃないわね。あ
んた、嵐なんて言柴、笑っていいよもの編集長の名、見ただけで悲
鳴をあげたじゃないのと言ったら。

Dr. 弁 先、先っ！

夏子 ジャガーの眼と共に生きるって子供みたいなこと、まだ言う
から、キーツって、こつちも爪たて、引っかいたんです。

Dr. 弁 あんたが、ジャガーツ。

夏子 そうしたら急に、子供の蹴る空の牛乳びんが、コロコロと。

Dr. 弁 そんなの、どうでもいいじゃないですか。

夏子 いえ、ここ大事なんです。空の牛乳びんがコロコロと、あた
し達の足元に転がって来たんです。そうしたら、この人、急に蒼
くなつて、ずっと見とれていていた後に。

Dr. 弁 蹴り返した？

夏子 いえ。今、僕、何か言ってたね。子供のような、取るに足り
ない事を、ハシカのようにわめいていたねと。

Dr. 弁 牛乳びん一個で。

夏子 ええ、そうよ。つまらない愛を喋っていたのよってゆすると。

Dr. 弁 好転したのか？

夏子 正常に。常識が戻って来たけど、今度は、目を押さえて、こ
うわめくんです。痛いと。

Dr. 弁 痛さの前は？

夏子 しんいちさん、どうなの？

しんいち とても快かったんです。

Dr. 弁 何が。

しんいち 拒むように思えたこの目も、ぴったり板につき、いつもより、鮮やかに夕陽も見えて。それは、只の夕陽じゃない。何かの雄叫びのように見えて。

Dr. 弁 こういう男か？

夏子 いいえ。

しんいち 今迄、吹きつけられた事もない他人の息もこの頬を過ぎ、無理だと思った事も、眼前で掴めると思う程に。只、それは、その時だけだったんです。そこを離れて、金魚のように揺れる振り袖見つめ、転がって来た牛乳びんを見ていたら、急に心勇んだ事まで、馬鹿らしく、そうしたら急に……。

Dr. 弁 心変わりで襲ったと言うんきや？

しんいち 裏切った体を、さいなむように。

Dr. 弁 目がか？

しんいち ここにはまったジャガーの怒りが。

Dr. 弁 黙れっ、熱血快男児！（と、目を開いて、目に怒鳴る）

しんいち （払って）だから、この痛みを抜ける術は、このジャガーの眼に、好きな様を選ばせるしかないんですっ。

Dr. 弁 （裸になって）そんな事したら、俺の体はどうなる。好きな様に胃に夕食をくらわし、好きな時にポウコウに小便さすのか。しんいち ここに牛乳びんを置きます。（と、ポケットから牛乳びんを抜き机に置く。ジャガーの右目は、この間、片手でふさいでいる。そして、ズボンのポケットから、リンゴを一個取り出す）そして、患者が死んでも、誰にも食べられずに待っていたこのリンゴ。（置く）このどちらかを僕はこれから取ります。と言いな

がらも僕の心はもう、どちらかに決まってるんです。余程の事がない限り、その狙いは狂わんでしょう。そして、ジャガーの眼と共に近づきます。どれを取るか、ジャガーの眼にも分かりません。只ジャガーの眼にそれをしかと見て貰いたい。そんな気持ちで並べて見ました。先生、Dr. 弁 もしも、僕がどちらか取って、苦しい声をあげたならば、この他人の目、取って下さい。僕から、それ、ハクリして下さい。

Dr. 弁 もしもリンゴを取ったらば。

しんいち 災いのリンゴがさらにくるでしょ。(と、手を下ろして右目を開ける)

Dr. 弁 お前が取るのは？

しんいち これです。(と、素速く、飛びつくように牛乳びんを掴もうとする) これなんだっ。ジャガーの眼！

が、掴もうとする牛乳びんはない。それは横に払い飛ばされる。机の前の床板、それは、どんでん返った不思議な板だが、それが反転して立ち、そこにくるみをはりつかせ、戸と共に立ったくるみが、机の上の牛乳びんを払い飛ばしたのだ。

しんいち !

くるみ (空を掴んだその手に、持って来たリンゴを掴ませ) なぜサジを投げるの？

しんいち 僕は。

くるみ どうして、親のあとをみすみす追うの？

しんいち いえ。

くるみ 夕陽を、忘れられたケモノの雄叫びとまで言ったその眼を
どこの暗闇に戻すと言うの、しんいちさんっ。

夏子 いやっ、いやよっ、しんいちさん。

くるみ なびきかかり、あたしと暮らすとまで誓った約束を、どこ
の主婦に開けわたすつもりなの？

しんいち なぜか。

くるみ 言って、あたしを好きになったと。

しんいち 皆います。

くるみ みんなの前で、ジャガーの目ばかりか、あたしをこよなく
好きになったと。

しんいち こよなく。

くるみ 妬まれるほど。

しんいち 好きになった。

くるみ ごらん。あのふてくさった医者顔を。あんたが牛乳びん
を掴んだらば、人の体にはおさまりきれない、世にも稀な瞳とし
て、それを剝離するでしょう。そればかりか、追いかけられる奇
怪な肉体の一部として、ビーカーに閉じ込め、サーカスに売るか
もしれない。しかも、人の体の中で反乱起こす前科者の眼として、
学会に提出するだろう。塩水につけ、それが、ジャガーの眼とし
ての光を失なう下で、鉄面皮の観察くり返す！ ここはタブー
の掟が幅きかす関所なんだっ。もし、その眼に激痛が走るなら残
りやいい。そして、ジャガーの眼と共に抜ける気ならば、リンゴ
を掴みやいい。おかしいかい？ その眼を守る為にあんたをなび
かすこんな女が。でもあたしには、もう、その眼とあんたの区別

がつかないんだ。その眼を守るなら、あんたの体も守るだろう。
さあ、ジャガーの眼と共に生きるなら、善福寺川に映った去年の
入道雲に乗ってここを去ろう。

しんいち そんな雲が来るでしょか。

くるみ このリンゴの皮むけば。

しんいち (いつか眼を押さえていた手を落としているのに気付き)
痛くない。いつか痛くなくなってる。

くるみ そうよ、シンジさん！

しんいち (ポロツとリンゴを落とす)

くるみ (拾って机に置き) 掴んで。災いのリンゴに変えて！

Dr. 弁 剥離しろっ。

しんいち 剥離したくないんですっ。

Dr. 弁 この女を剥離するんだっ。

インターン達 (迫る)

くるみ (後退り) さあ、こんな関所は後にしよう。

老婦長 (いつか、Dr. 弁の横にいて天井から下がるヒモを引っぱ
る)

ストーンと、天井から、巨大な牛乳びんが、底を抜いた透明
の牛乳びんが落ちて来て、くるみを閉じ込める。

くるみ (透明な壁を叩いて) しんいちさんっ。

夏子 しんいちさんっ。

くるみ しんいちさんっ。

夏子 しんいちさんたらっ。

くるみ しんいちさん。

夏子 これでもいいのよ、しんいちさん。痛がつて、これじゃ、痛がつて普通なの、しんいちさん。

しんいち (夏子をかじりつかせたまま、確かめるように強く、机の上のリンゴを掴む)

机の上のリンゴ、パンツと弾けて割れる。中から、雲が、煙が、入道となつてたち込める。

くるみ 来たでしょ、あんたの見たい入道雲が。

しんいち 青春は？

くるみ その中よ！

老婦長 (サツと寝台のシートで、くるみの入った透明な囲いを覆う)

Dr. 弁 (電気掃除機をさし上げる)

電気掃除機の中に、煙が、吸い取られてゆく。

Dr. 弁 (青春の雲を吸い取りながら) 肉体の一部を追う者はなく、追われようとする一部など、この世にはない！

くるみ (透明な壁を叩いて) どこへ行ったの？ その雲に乗って、どこへ行ったの？ そして、もう今はいないの？

電気掃除機の吸入口、しんいちの右目に押しつけられる。それを押し返そうとすると暗転。透明な壁を叩く音のみひ

びき続ける。

第三幕

下手にサンダル会社が置かれ、そのボンネットに修復された不思議のリンゴが置いてある。しかも、前面には、煙が吹き出かかっている、電気掃除機が置いてある。何も、できなかつた田口は、少年と共にそれを、今盗んでいる。

田口 (ストローで、掃除機の腹から煙を吸い出し、リンゴに駆け寄る)

少年 (死んだ犬を背負ったまま、同じくストローで掃除機の煙を吸い出す)

田口 (リンゴに吹き込み、掃除機に駆けつける)

少年 (リンゴの穴にくわえたストローを突っ込む)

田口 (吸い出した煙を、リンゴに入れんとする)

少年 (掃除機に戻ろうとして、田口にぶつかる)

田口 ごめん。(と、言ったところで、口から煙消える)

少年 (吸っている)

田口 (一緒に掃除機の穴にストロー差し込む)

少年・田口 (一緒にリンゴに戻る)

が、誰も押さえてなかつたので、リンゴから、吹き込んだリンゴの中の煙、立ち昇る。

田口 (リンゴの穴を手で押さえる)

少年 (田口がサツと手を離れた時、ストロー入れて吹き込む)

田口 (代ろうとして、咳込む)

少年 (ちよちよつと背をさすってやって掃除機に駆けつける)

田口 (咳込んだ時に宙に、又去りかける煙をストローで追いかける)

少年 (ぶつかりそうになるのをよけて、リンゴにストロー差し込む)

田口 (リンゴに吹き込む)

少年 (掃除機に駆けつける。煙がない。掃除機の腹の蓋を開け、逆さまにする)

煙、出ない。

少年 (ストロー、落とし) おじさん。

田口 (吹き込みながら、振り返り) うん？

少年 あらかた、ない。(と見せる)

田口 (ストロー抜き、リンゴの穴にテープはり) やったか。

少年 やった。

田口 よおし。(と、リンゴを転がす)

少年 何してんの。

田口 追うんだ、リンゴのこの後。

少年 付き合いきれないよ、そういうの。

田口 いいから。(と、止まったリンゴを、又転がす)

少年 吸い取られた魔法の煙を、戻すんなら分かるよ。

田口 さぼんなつ、きさま。

少年 どうして、そんなもんの後追うの、それより、どっかにある
どでかい牛乳びん探すの先決だろう？

田口 いやしくも、あいつは探偵だ。

少年 おじさんは上司。

田口 なかんずく術中に陥ち。

少年 そうなの。

田口 あえて、その罫を泳ぐ我れらが使者だ。

少年 何だ、こんなの。(と、掃除機投げる)

田口 それが、すぐ助け出される事を待つたらるか？

少年 おじさん、恐いんだろ。

田口 ……。(睨む)

少年 あの秘書が怖いんだろ。

田口 上司が部下を何で、怖がる？

少年 あの時だって。

田口 おちよくるな、きさま。

少年 事実、おメエ、身動き取れなかったじやんか。

田口 それが大人に言う事か。

少年 何故、出てあげなかったの、人のピンチにどうして力を貸せ
ないの。

田口 それは。

少年 何だっ。

田口 もう少し、見ていたい他人だったから。

少年・田口 (少年、田口にぴったり寄り)

へここに来て 思い出す

あなたの好きな

ひとつの言葉

愛するのは 皆 他人

田口 それが。

少年 うん。

田口 こんなうだつの上がらない探偵社に、物を頼むのは。

少年 ……。

田口 解けないものを解けと言ってるのではないのだろうか。

少年 じゃ。

田口 何処だ、フィリップ・マーロー！

少年 何処だっ、牛乳びん！

田口 何処なんだ！ 僕の過去！

と言う田口の目には、片目だけのサングラスが、かかっているのを、皆さんは、ご存知だろうか。サンダル会社引っぱって花道に去りかける。臓器横丁の路地奥から白い背広のフィリップ・マーロー風なる美形が、葉巻を手にそれを見送る。くるみかと見えるが違う。一幕のくるみの男装を真似ているのだ。それは。サラマンドだ。ところで、舞台は院長室の隣りにある病院の研究室と思われる。ピーカーや、フラスコが、棚に並んでいる。そして、液体につかった様々な臓器が見える。又、このガラスの容器が並ぶ棚は一幕の横丁のように、二つの路地を入れて三つ区切られている。二つの路地にはさまれた真ん中の棚には、主に眼球

の入ったガラスびんがある。その棚は三つの棚の中で一番幅があり、棚の向うは部屋になっているようだ。眼球の棚の横路地から出て来た男装のサラマンダ、去ろうとする田口を見送って歌う。

サラマンダ へ何故言ってしまったの

過去などと

過去を知るのは

あたしだけ

何故振り向かないの

片目だけでも

冷たい肌を求める

その目が

今では

恐ろしく思うのか

サラマンダ、上手の椅子に座る。悲しげに眼を拭いてみせる。涙が出ない。そのいらただしさで小さな卓台を叩き、うつぶす。下手のドア、ゆっくり開く。夏子と眼帯をしたしんいち入って来る。サラマンダを、この部屋の何処かに閉じ込められているくると勘違いする。

サラマンダ (しんいち達に背を向けて固くなる)

夏子 言うのよ。今度こそ、はっきり言うのよ。

しんいち ……院長に許可を貰って。

夏子 夏子とここに来たのは！

しんいち あの煙を吸った僕がどんな男になったか見せる為です。

夏子 振り向かせて。

しんいち こつちを見て下さい、くるみさん。

サラマンダ (背を見せたまま、しゃ幕のかかった、あるいは、シ

ーツのかかった小さな、ついたてを引いてしまう)

そこにシルエットが映るだけ。

しんいち (その背に) あの煙に入っても僕は変わらなかつたでしよう。

シルエット ——。

しんいち もしかして変わったのかもしれないと思い、鏡に姿を映しても見たけれど、そこに立つのは昨日のままの僕でした。それを見せて帰ろうかとも思いましたが、そうして背中を向けているなら、却って気が楽な気がします。ランプ、僕は、初めて僕の前に立ちふさがった男装姿に何も話しかけられないまま、帰る気がするんですから。(頭をペコリと下げて行こうとする)

ドオンツと壁に何かの打ちつけられる音がする。

しんいち (止まる)

夏子 (袖を引っぱる)

しんいち 昆虫は、その何万年の歴史の中で、姿を次第に変えて行つたと言います。甲虫の雄は、森で闘う角が欲しいと思った時に

その角が生えた訳ではありません。何万年もの思いの中で角をつくったんです。あの煙の中で僕が思ったのはそれでした。

ドオンと何かが又ぶつかる。

しんいち（振り返り）僕は変わろうとしているでしょうか。くるみさん。僕は、まだ、この姿を、ジャガーの眼に見せていません。（眼帯を押さえる）変わったかもしれない姿を見せるのが恐ろしいのか、暗い映画館のボックスに身を沈め、そっと眼帯外しかけ、暗い体を触っていました。

ドオンとぶつかる音。

夏子（袖を引っばる）

しんいち 見ていた映画はピーター・イエーツの『謎の星クルール』。近未来の映画です。そこに現われる武器を知っていますか。それはかつて人に使われ、誰も使う事の出来なくなったグレイブ！ それを僕は、善福寺のどぶ川で捨てて来ました。

逆さ十字剣のような枯木を取り出す。

しんいち こうして話しているながら、振り向けない何かがあるなら、これを投げます！

シュツと投げる。ゴムがついている枯れ木のグレイブ飛ん

でゆき、サラマンダの背に当る。

サラマンダ (仰向けに椅子ごと倒れる)

しんいち (抱き起こして見る)

人形である。

しんいち (眼帯を外しても見てみる) ……。

夏子 こうなるのよ。全てが終われば、あの女だって人形ごときになりますって。(と、揺する)

しんいち (呆然としながら立つ)

夏子 さあ。

しんいち (歩く)

夏子 (妄想の部屋から逃げるよう)

しんいち もう一度投げます。善福寺の川を乱すつもりでっ。(投げ
げる)

宙を裂く。打ちつける音で、開きかかった中央の棚の向こうの、ベニヤ板を破って、牛乳びんの大きいものが転がり出る。ドオンと打ちつけられる音は、くるみの入ったその容器であった。

しんいち (眼下の容器を見て) !

くるみ (胴から割れた牛乳びんの容器を上半身だけまだ冠って膝を立てる) 取って、この蓋を。

しんいち (手をかける)

くるみ (しんいちの膝を抱き) 何が終わるの？

しんいち (蓋を取って見下ろす) ……。

くるみ 人形ごときになる為に、あたしとあんたの何が終わるの？

しんいち もしも変わっていなかったらば。

くるみ 変わったよ。

しんいち そうでしょうか。

くるみ 何もかも、見違える程に。(と、引いて見る)

しんいち そう言ってくれるのは、あなただけで、このグレイブを

投げる迄、僕は自信無かったです。

くるみ よく投げた。

しんいち でも、そんな事で変わったと言えるでしょうか。

くるみ 善福寺の川で拾ったんでしょう？ 誰も気に止めないそん

な枯木を、呪いの牛乳びん割るつもりで拾ったんだらう。

しんいち 宙は裂いたけど割ったと言えるかどうか。

くるみ 以心伝心がこもっていたよ。空気を裂いて、出て来いと言

ってるような。(十字の先を触る)

しんいち そんな力があつたんでしょうか。

くるみ こう投げたんだな。(と、空気を裂く)

しんいち ええ。

くるみ こうもな。(と、夏子に投げる)

夏子 (よけ) 変わらないわ、しんいちさん、あんた変わったたら、

おかしいわ。

くるみ ジャガーの眼にも見せてみな。きっと変わったと言ってく

れるよ。(と、小さな鏡を見せて顔映す)

しんいち (顔をそらして) まだ見せてないんです。

くるみ じゃ、たっぷり見せて！ きつと言うよ、何か晴れやかだぞって。

しんいち (ゆっくり見る) そうなのか、ジャガーの眼？

くるみ どうだ。

しんいち なんか、凄いです。

くるみ どう。

しんいち こんなに自信満々に自分の顔を見れんの初めてみたいに！

くるみ うわあつ。(と、覗き) あたしも見とれる！

しんいち 何もかも手に入れられそうな――。

くるみ じゃ、あたしを先ず、手に入れろっ！

しんいち そうですね。(と、肩を抱く)

くるみ 行く手に見えるものは？(と、立つ)

しんいち 吠える様な夕陽。

くるみ そこで命を擦り減らせるか。三人目の眼で、やっと居心地着いたその眼と共に。

しんいち 変わったならば。

くるみ 変わらなかったならばなんて考えるな、変わらなかったかもしれない自分なんてのも、アルバムから抹殺するんだ。

しんいち それで、何処にゆくんでしようか。

くるみ いつか、あの路地に立とう。他人の家の間の何処かに。置いたリングが姿を消すように、奇妙なつむじ風に巻かれてそこに立ち、ジャガーの眼に案内させよう。それが、あたし達の臓器交換序説さ。

しんいち　じゃ、あなたも少うし変わって下さい。

くるみ　変えるものがあるなら。

しんいち　その薬指にはまった結婚指輪、ポケットにしまってくれませんか。

くるみ　気になるなら。(と、抜く)

しんいち　すみません。

くるみ　いいんだよ、もし何だったらば、昔の人の写真が入ったこのロケットもしまおう。(と、首のロケットを取る)

しんいち　それはシャツに隠れて見えませんから。

くるみ　でも、ポロっなんて出たら。

しんいち　……。(下向く)

くるみ　もし、何だったら捨ててもいいんだよ。

しんいち　もったいないですよ。

くるみ　平気、平気、こんなの、ポイ。(と、床に)

しんいち　……。

くるみ　ああ、こっちの指輪も捨ててみせようか。

しんいち　分かりました。(と、握る)

くるみ　ひとつも惜しくないんだから、あたし、いつか、あんたを、

シンジさんと呼んだの気にしてんでしょ。大丈夫だよ。もうそういう間違い起こさないから。(と、捨てる) ああ、あんな所に転がってった。

しんいち　……。

くるみ　もし、何だったら、踏みつぶそうか。

しんいち　……。

くるみ　こうやって、足上げるだろ。それで下ろしたらペシャンコ

よ。

しんいち (その足踏んで) 止めて下さい。

くるみ だって気になるんでしょ。

しんいち いえ。

くるみ こっちの定期にも入ってんだ。これも捨てるか。(と、放り投げる)

しんいち ……。

くるみ まだあるかもしれないよ。この耳横のシミだって、キツスマークがそうだったかもしれないし。シャツだってあたしがねだつて買って貰ったもんだし、(ボタン、引き破り捨てる) この胸の中を開けば、アパートで暮らしてた思いがあるし。

しんいち (捨てられた物を拾い、差し出す) 拾って下さいっ。

くるみ それじゃ、何で指輪を気にする!

しんいち もう、気にしませんからっ。(差し上げる)

くるみ じゃ、あたしは変わらなくていいと言えっ。

しんいち 変わらないで下さい。

くるみ 変わるのはあんただけだと。

しんいち 変わるのは僕だけ。(差し出す)

くるみ ……。(ジャガーの眼を見ている)

しんいち ……。

くるみ ——。

しんいち 何を見ているんです。

くるみ ジャガーの眼が。

しんいち え?

くるみ やはり、変われと言っている。

しんいち　と言いながらも前の男の目なんですよ。

くるみ　それが、やはり変われど。変わらなければ、その目と、あんたを救う事は出来ない。変わろうつ。(肩掴み) あたしも変わろうつ。

としんいちの手から、指輪もロケットも落ちる。夏子去るのに二人は気付かない。「ボオン」と上手の柱時計が鳴る。

しんいち　(ボウと立つ) ちょっとここで待って下さい。

くるみ　(足にしがみつく)？

しんいち　一時までに。

くるみ　え。

しんいち　一時までに拒絶反応が起きるかどうか、猶予を貰って来たんです。それで、もし連絡しないと手術の準備が始まるんです。

くるみ　その気が無いならすっぱかそう。そして、ここを二人で出ようよ。

しんいち　でも、あの人にだけは言っ来てなけりやなりません。この目はジャガーの眼としてよくやっていると。

くるみ　え？

しんいち　肉体の一部を商うブローカーを洗い直して。

くるみ　うん。

しんいち　シンジさんの目だったこの目ですが、それを、かつて売った者を探したんでしょ。

くるみ　ジャガーの、ジャガーの眼として生まれた？

しんいち 検査室から出て来た所を看護婦に紹介され、それをあなた
はジャガーの眼と言ってるらしいが、それは金に困って売った
只の目だと言いました。

くるみ うん。

しんいち だから、僕はそうじゃないと言ったんです。これは、人
から人を生きる毎に活性化する目だと。

くるみ よく言ってくれたね。

しんいち でも、あんたは、その目に取りつく女に魅入られて、そ
れを考える度に苦しむと言うじゃないか。

くるみ そいつはその目の価値知らないんだ。

しんいち 今は苦しまないと。

くるみ うん。

しんいち それじゃ、一時までに、その女に会って苦しむか苦しま
ないか賭けをしよう。もしも苦しまなかったらば、俺も両手を打

ってジャガーの眼だ、俺よりもお前の中で生まれるべきだったそ
の眼はジャガーとはやしたてよう。

くるみ もしも苦しんだらば。

しんいち そんな苦しみに人が耐えられる訳がない。これは冗談だ
けど。

くるみ え？

しんいち 冗談ですから耳に入れる事はありません。

くるみ 言って。

しんいち 今は金があるから、買い戻したいと言うんです。

くるみ (蒼ざめる)

しんいち 言って来ます、シヤクだから。

くるみ (袖摺む)

しんいち この賭けは勝ったと言わせて下さい。 (と、去る)
くるみ 待って。(と、続くが、入り口でロケットと指輪を振り返
る。拾おうかとためらうが、しんいちを追う)

田口と少年、上手から飛び出す。

田口 そんな男はいない。

少年 え？

田口 売った目を買戻すなんて男がいるもんか。

少年 何故？

田口 あの目は元に戻らない。

少年 そうなの？

田口 人から人に移動して、さらに光る目が、何で元に収まるもん
かっ。

少年 しんいちさんと同じ事を言ってるじゃん。

田口 僕が思う事を、あの他人が言ったんだ。

少年 でも買戻したい男がいるとしたらば？

田口 行けえっ。

少年 チロ、行こうっ。

下手のドアを駆け抜ける。サラマンダだけが転がっている。

「サラマンダア」と探す声が入り口からドアを背負っ

た二の戸が、懐中電灯を持って入って来て辺りを照らす。

続く一の戸、床の上の人形見つけて「あそこだ」。二の戸

抱き起こす。

その人形の手首にロケットの鎖が引つかかっている。

一の戸 サラマンダは見つかったけど、扉さんが何処に行ったか分からんぞ。

二の戸 (腹を抱えて、人形の) うすうす考えたんだけど、車椅子の肘かけを壊して、わざと落とすようにしたのはボスじゃないのか。

一の戸 どうして？

二の戸 扱い切れんのよ、ボスだって。捨て際を狙ってさ。

一の戸 それじゃ、これを届けたら、喜ばれないのかい。

二の戸 一応届けるけど。

一の戸 何処へ。

二の戸 二十の扉の何処かにさ。

連れ去られるサラマンダの手からロケットキラリ、花道に六枚の戸が駆け込んで来て縦列に立つ。

しんいち (花道を抜けて、最寄りの戸を開ける。次々と戸を開けてゆく)

まるで、この部屋を飛び出した後が、永遠の扉が続いたように。

しんいち (舞台に近い最後の戸を開けて舞台上がる)

前の標本室の棚にカーテン下がり、別室に見せるが、そこは何やら前と同じ感じである。

しんいち （戻ろうとする）

声 どおかね。

しんいち （振り返る）

六人の戸 （Dr. 弁の登場で、舞台に駆け上がり左右に開く）

Dr. 弁 （トランプの婆抜きをしながら、下手寄りの棚の間から出て来る）

眼帯をした男 （Dr. 弁の手から一枚抜く）

しんいち 苦しみませんでした。

Dr. 弁 （眼帯をした相手からジョーカーを引いて）アチャーツ。

しんいち 苦しまなかったんです。

眼帯をした男 （札を抜く）

Dr. 弁 まだ分からんだろう。

しんいち 分かったんです。

Dr. 弁 わあー、抜いたっ。

眼帯をした男 （ジョーカーを持って首かしげる）

しんいち （傍にゆき、トランプを叩き落とす）一時までに苦しまなかったんです。

Dr. 弁 婦長っ。

老婦長 はい。（と、奥から出て来る）

Dr. 弁 ここの時計は進んでいるんだ。

老婦長 （時計の所にゆき、長針を二十前に戻す）

しんいち ？

眼帯をした男 （カードを拾い集めている）

Dr. 弁 グリニツヂ天文台を呼び出せえつ。

老婦長 （電話のある所へ）

しんいち 何分あるうと。

Dr. 弁 お前は苦しまないのか！

しんいち 隣りのミヨちゃん。

Dr. 弁 何！

しんいち 献血車の後ろで、お前の親の魂はこの牛乳びんに詰め込んであると言われてから。

Dr. 弁 隣りのミヨちゃんが何なんだ。

しんいち ……僕は分と牛乳びんを怖がりました。

Dr. 弁 この野郎っ、婆ア抜けっ。

しんいち その時でした、引っ越して来た隣りのミヨちゃんが現われたのは。

Dr. 弁 ふむ。

しんいち ミヨちゃんは、ゴミ箱の上に置かれた空の牛乳びんを、避けて通るのを見て、いつもそうして何を怖がるのかと言いました。ある雨の日、傘を持って待っててくれたミヨちゃんに、とうとう空の牛乳びんを怖がる訳を話すと、明日、きっと怖がらないようにしてやる、こんな物と、猫が引っくり返した牛乳びんを、雨水の中で掴みました。

Dr. 弁 何の日記だ。

しんいち 五月六日、晴れ。ミヨちゃんは、片手を後ろに隠して、僕の家に来ると、ごらん、もしもここにしんちゃんのお母さん達

としんちゃんの魂が入っているなら、あたしがそれを取り出してやると、空のびん見せ、夜中に練習した手つきで、片手を、牛乳びんの中に差し込みました。指先で空気を引っかき抜こうとしたそんな時、何故か、手首にさえきつく。夜と昼は違うのかしらとミヨちゃんは、差し込んだまま、びんを壁に叩きつけ、裂けた拳の中の魂を返しました。夏が終わって引っ越し、いつも引っ越しもんだから、大きくなった時、又引っ越して来ると言ったミヨちゃん、それがくるみなのではないでしょか!! 何分経ちました。十分ですか!

Dr. 弁 野郎時間稼ぎか。

しんいち まだあります。

Dr. 弁 やめてくれ、少年時代の創作はっ。

しんいち 僕はそれから引っ越してゆく少女に憧れて、いつか引っ越してゆく大人になりました。二年契約で住んだアパートで、大家さんが、そろそろ時間ですよと言う前に僕は風呂敷背負って月夜の町に旅立ちます。

Dr. 弁 ミヨちゃんの話して。

しんいち お盆のような月の下を歩きながら、いつかミヨちゃんに会えるんじゃないだろうか。リヤカーを引く少女が路地を曲がる時、「ミヨちゃあん」と駆け出して、知らない人のアパートに駆け込んだ事もあります。唐草模様の風呂敷を背負っている為に、空き巣と間違えられ交番に突き出されました。お前は何をしていると言うお巡りさんの言葉に、僕は、引っ越し続けるミヨちゃんを追っているんだと言いました。何故なら、幼い、とても幼い人の血にまみれた牛乳びんを僕は忘れません。我が家の魂を拾

う為に、血にまみれて碎け散った牛乳びん。それを僕はのりにつなげて持っていました。少女が大人になるように、鮮血も日毎に黒ずみましたが、僕はそれを後生大事にアパートからアパートへと移り住みました。しかし、夏子と会ってからは、いつか何処かへ行ってしまった牛乳びん。それが肥大してあのように現われるとは思ってもいなかった。それは、お前達がとりこにしたくるみの姿だ！

Dr. 弁 そんなお前がどうしてあの女に追われて、その目を疎ましがった？

しんいち 最も気になるものが、一番危険であるように。

Dr. 弁 すると、生活の何処かで危険を待っていたんだな。

しんいち あれは只の夕陽だ、狼が吠える落日なんかじゃないと言
い聞かせた時、僕のこの眼孔の中で獣がうずくのを感じていまし
た。

眼帯をした男 しかし。

Dr. 弁 うん？

眼帯をした男 その目には欠点があるんだ。

しんいち ？

眼帯をした男 三日月の小さな傷だ。

Dr. 弁 どれ（と、覗く）

しんいち（顔をそむける）

眼帯をした男 その傷の為に西陽を見ても、上がって来る月が、お
前には二つ見えた筈だ。

Dr. 弁 その傷は？

眼帯をした男 このジョーカーの傷ですよ。

前に来て、その札見せる。

Dr. 弁 婆抜きの。

眼帯をした男 片目をつむって、その目でカードを見渡すと、どうしてか運強く、握られた札の何処にジョーカーがあるかが分かるよで。

Dr. 弁 どうだ、分かるか？（と、眼帯をした男から札を取って持つ）

眼帯をした男 取ってみろ。

しんいち （信じられない）

眼帯をした男 ある日金賭けて、これやっていると、負けた相手が貴様札に傷をつけてるなど言いやがるんで。

しんいち （押しつけられた札を、取りかけてやめる）

Dr. 弁 （さらに押しつける）

眼帯をした男 新しい札を買って来させて始めると、一晩かけてもジョーカーは相手の手から移動せず。

Dr. 弁 うん。

眼帯をした男 負けがこんだ向こうはムキになり、不動産の権利書を賭けてまで勝負を挑んでまいりやした。

Dr. 弁 お前は何を賭けたんだ。

眼帯をした男 向こうが望んだのはその目です。

Dr. 弁 取らんかいっ。（と、差し出す）

眼帯をした男 冗談が命賭けになり、証人までつけて勝負を続けるよと。

Dr. 弁 バクチは怖いな。

眼帯をした男 三日目の朝、キリがないので、これが最後と札付き
合わせると、こちらは面白いようにジョーカー避けて、勝負の力
タがつきやした。不動産証書をかき集めるあたしを見ながら、相
手は、ちよいとした慰みに、もう一度、今度は俺に札を引かせて
みてくれと。五十三枚のカードをあたしに持たせ、そのうちの
一枚をゆっくり引いた。しかし、何の悪運か、野郎が引いたのはジ
ョーカーで、それを、見上げるその目に投げつけた！ それ
が、その時のジョーカーの、切れるような一枚が、その目に当り、ま
るで。

Dr. 弁 何っ。

眼帯をした男 笑うジョーカーの、口みてえな傷になりもうした。

Dr. 弁 それで、三日月が二つ見えんのか。

眼帯をした男 イカサマでつけたカードの傷も。

Dr. 弁 バチ当たつてな。

眼帯をした男 それからはカンが狂って、只、ジョーカーばかりが、
その目の中で踊ってござる。

Dr. 弁 そうか。(しんいちに)

しんいち 僕はバクチをやった事ありません。

眼帯をした男 おめえはバクチをやってるよ。

しんいち 将棋だって駄目なんですから。

眼帯をした男 臓器交換はバクチじゃねえのか！

しんいち ——。

眼帯をした男 その目を買ったのはバクチじゃねえのか！ この医
者に賭けたのはバクチじゃねえのか！

しんいち (Dr. 弁を見て) バクチでしたが。

Dr. 弁 バクチだ！

眼帯をした男 おめえの好きなミヨちゃんも！

しんいち ミヨちゃんは、バクチと関係ありません。

眼帯をした男 どっこい。

全員 どっこい！

眼帯をした男 雨の中で、牛乳びん拾った時、てめえはどうして止

めさせなかった？

しんいち ？

眼帯をした男 ちっちえい娘が、なんかする。それを持って家に帰

ったのは、きつと、何かする、てめえは、そう思っていただろう。

しんいち ああなるとは思ってません。

眼帯をした男 ああなったんだ。

しんいち ああなるなら！

眼帯をした男 お前は、いたいけな隣の女をバクチにしたんだっ。

しんいち あれがバクチですか。

眼帯をした男 堂々めぐりだな、この野郎。お前は少なくとも、牛

乳びんに魂を取られるなんて空想を、花や雲しか書けないスツペ

タンコにたきつけただろう。

しんいち 一才違いです。

眼帯をした男 お前が一才なら、向こうは生まれて来ないようなも

んだろう。

しんいち ともかく、あれはバクチと言えません。

眼帯をした男 いや、根っからの次郎長だ！

しんいち あと五分だな。(時計を見る)

眼帯をした男 時間を気にするそれもバクチだつ。

しんいち それじゃ、時間を気にするサラリーマンも、バクチ打ちですか。

眼帯をした男 会社の部長や課長に長がつくのは何なんだつ。

しんいち しかし、半はありません。

眼帯をした男 チョーさんに半さんが出て来たら、半どんのひけ時はどうなんだ。

しんいち メチャクチャ言わないで下さい。

眼帯をした男 メチャクチャに貴様付き合ってたろう！

しんいち ともかく。

眼帯をした男 お前はバクチが好きだ！

Dr. 弁 その結論が何なんだ！

眼帯をした男 こうでさ。

サツと棚に下りていたカーテンを引いて眼球の棚々を見せる。

眼帯をした男 ドアの手品で舞い込んだけれど、ここは前の標本室

だ。

しんいち (見回わす)

眼帯をした男 なんもかも同じだが、何かがちよっと変わってない

か？

しんいち 人形のいないのと……。

しんいち 「！」と床を見る。

眼帯をした男 何だ。

しんいち 指輪とロケット拾ったんなら返して下さい。

眼帯をした男 どういう。

しんいち 覗いていたなら分かるだろう。

眼帯をした男 あの女が拾って行ったと思わねえのか、捨てたと見せて未練たらしく！

しんいち いえ。

眼帯をした男 だとしたらどうなんだ、おめえの悩みは見え見えよ。

その目が無くてもあの女はお前を愛したか、愛がいやなら、とりにしたか。言い寄ってくれるのはその目を持つてる間じゃねえのか、その目に何かあったなら、くるみはお前を見限らねえのか。

たとえば、おい！ しん坊！

全員 しん坊！

眼帯をした男 その目が、また誰かの目になったとしたら、あの女は、そっちへ行くぞ。

しんいち ——。

眼帯をした男 それを俺が買い戻したとしたらどうする、しん坊！

全員 しん坊！

眼帯をした男 あの女は俺を愛すぞ。とりこにするぞ。

全員 ニヤニヤ！（眼帯をした男を突つつく）

眼帯をした男 首を振るのか、了解するのかわ。

しんいち （首を振る）

眼帯をした男 しかし、あの女が前の男の思い出で生きていたらどうする？ 俺に目が移って来ても、また俺の部屋にケーキを置く

だろ!!

しんいち いえ。

眼帯をした男 賭けてもか？ 賭けても、あの女はしんじの写真が入ったロケット持って行かないと言えんのか！

しんいち 賭けても。

眼帯をした男 何賭ける。

しんいち これです。(と、グレイブ見せる)

眼帯をした男 そんな枯木にや用はねえつ。

しんいち そっちは何賭けるんですか。

眼帯をした男 何でもおめえの好きな物、俺の持ってる――。

しんいち 今の所好きなもんなんかありません。

眼帯をした男 じゃ、勝負がいたら、お互いに好きなもんを取り

合おう。

下手のドア、パタンと開く。医務室を探してもいないので元の標本室に戻れば、しんいちも帰って来るかと、くるみは戻って来た。

くるみ (いぶかしげに人々を兎る)

全員 (振り返る)

くるみのポケットから、詰め込まれたロケットの鎖が垂れ下がっている。この時、やっと「ボオン！」と一時の時計が鳴る！

全員（鎖を見て含み笑う）

眼帯をした男 勝った。俺は勝ったぞ。（と、飛び上がる）

くるみ（つかつかとしんいちの所に行き）どうして振り切ったの。

しんいち え？

くるみ 追うあたしを振り切って、元の部屋で何してたの。

しんいち ちよっと。（と、隅へ連れてゆく）

くるみ いいから行こう。（袖を引く）

しんいち それ、捨てて行ったものじゃないんですか？

くるみ 捨てて行ったよ。（と、掴み出す）

しんいち 捨てて行ったものがどうして入ってんですか。

くるみ 医務室にいないんでここに駆け戻ったらね。（と、面白そ

うにロケットいじり）

しんいち ……。

くるみ その廊下にぶん投げられてるマネキンがあつてさ、ひよ

いと見たら。

しんいち これが？

くるみ うん、手首に引つかかかってんで持って来ちゃった。（と、

しんいちの首にひよいとかける）

しんいち（外す）

くるみ 似合うのに。（と、突っ返されたのを自分の首にかける）

しんいち 変わったんでしょ。

くるみ 変わったよ。

しんいち それで捨てたんじゃないですか。

くるみ そうだけど。（と、いじっている）

しんいち それで、僕はバクチをってしまったんです。

くるみ 馬で？

しんいち これです。(と、ロケット掴む)

くるみ ?

しんいち あんたがこれを持って行ったか行かなかったか。

くるみ 持って行ったは？

しんいち 向こうの方で。

くるみ 持って行かないでは？

しんいち 僕でした。

くるみ すると持って来たからの結果を見ると。

しんいち 僕の負けです！

くるみ まだよ。

しんいち 負けなんですつ。

くるみ 持って来たけど、持って来なかったと言やあいい。

眼帯をした男 そんな言い逃がれが通用するかつ。(と、回り込

む)

くるみ グレイブを使えつ、ジャガーの眼。この仕掛けられた罠に

は向こうがかかる罠を使つて。それが持って来たけど来なかった

ん。

眼帯をした男 まだ言う！

くるみ (しんいちの肩に頭をつけ) あたしが後ろ髪引かれる思い

で、このロケットを取りに戻ったと思つたかい？ しかし、善福

寺川のグレイブで、牛乳びんから出て来たあたしじゃないか。女

の未練をエサにしてあなたの心を計りにかける。うす汚ねえ罠は

あたしに任しな。(奴らに) バカヤロオ、この胸に垂れ下がるロケ

ットは、持って来たけど持ってないっ、拾ったけれど拾ってない

んだ！

眼帯をした男　そこまで言うなら、こつちもゴリ押しでこう言おう。
（しんいちに）賭けたもんは勝負がついてと言っただろう。それをこれから言つてやる。その目だ。俺から誰かへ、そしてお前の体にはめ込んだその目を俺が移植し直す！

くるみ　この目がそつちへ移動したなら、人は皆猿にならあ。

Dr. 弁（眼帯に）何故買戻す。

眼帯をした男　こんな面白え事があるんなら、誰だって買戻してえだろうつ。

Dr. 弁　しかし、カンの狂ったジョーカーなんだろ。

眼帯をした男　バクチは駄目だが、情事が舞い込む。おいジョー

カー、いつからてめえはそうなったんだ？（と迫る）

しんいち　賭けに負けたんじゃないんですか。

くるみ　負けなかったと言うあたしに賭けな。

眼帯をした男　けりが着くまでドアから出すなつ。

扉人間、ドアを後ろから支えて、半円型で迫る。六枚の戸である。

くるみ　へ一つ開け

二つ開け（と、後退ると、覗いていた戸閉まる）

ふと思う

こんな謎

入ったのか

去ったのか

ここまで

ドア、中にいる者達を近づけ、挟むようにせばまる。その為、Dr. 弁 眼帯をした男、婦長と、くるみ、しんいち は胸つき合わされる。

眼帯をした男 その目の所有権はもう俺だ。

Dr. 弁 きつうい。

くるみ (股ぐら就って) 勝負はまださ。(ボコッ)

しんいち 痛あい、蹴られてんのは僕です。

老婦長 (胸を挟まれて) あ、だめ。

くるみ (背伸びして) あたしのじいさんは馬喰だ。こんなイカサマでコロリとゆくかつ。

眼帯をした男 所有権を主張する！(と、押しのけ)

ドアがまた半円に広く開いた所、下手の扉人間の戸を開いて、探偵田口が遂に出た。犬を背負った少年も。

田口 その所有権なら僕にもあります！

くるみ 上司っ。

少年 お姉さんっ。

くるみ 君もかつ。

田口 現われたくなかったけど遂に出た。使者、許せ。さらに尾行せねばならん所を、しやしやり出て。

くるみ いえ、遅いくらいです。

田口 この理不尽な主張にはあらがいがいようが無かったもので。

眼帯をした男 誰が何と言おうと勝ったんだ。

田口 誰が勝つ。

眼帯をした男 俺が。

田口 「俺」が何で勝つ。

眼帯をした男 何だその質問は。

田口 お前は何だ。

眼帯をした男 俺はお前の前に立つ者だ。

田口 そのお前が、何で所有権を主張する。

眼帯をした男 勝負に勝ったし、以前に、その目を持ってたからよ。

田口 以前とは、何処のチクゼン？

眼帯をした男 チクゼン雛人形の、バカヤロオ。

田口 持ってた証拠は。

眼帯をした男 ジョーカーの傷。

田口 ジョークか？

眼帯をした男 冗談はヨセ！

田口 もしもお前が、以前の持ち主でなかったなら、こんな勝負は
しはしまい。

眼帯をした男 いかにも。(うなづく)

田口 もしも、お前が以前の持ち主でなかったらば、こんなところに
もいやしまい。

眼帯をした男 何のタタミ込みだ。

田口 探偵と探偵が向かい合う為の。

眼帯をした男 ……。

田口 引き際です扉さん。

眼帯をした男　そう思うか。

田口　お世話になった扉さん、全てはもうバレてます。

眼帯をした男　そうなのか、田口。

田口　そうして下さい。

眼帯をした男　そうはゆかんのだよ田口君。

田口　じゃあ、どうゆく。

眼帯をした男　以前の持ち主で出た以上、以前の持ち主が現われん

事には、俺は何処にもゆけんだろ。

田口　それは僕です。

——！

田口　くるみ、僕なんだ。

片目のサングラスで振り返る。

くるみ　！

田口　これが義眼である事はサラマンダしか知りやしない。(と、

片目のサングラス外して見せる)

サラマンダ　(花道から近づいて来る)

田口　これ売ってから、ある日、僕は、あの目が今どんな他人の物になっていのかと思った。サラマンダと肩を組み、公園で、暇を持て余した奥さんの、取るに足りない火遊び見ながら、冷たい心の空洞を吹き抜ける木枯らし聞きながら、一体、あの目は、幸せな人の目になってるだろうか。

サラマンダ (ゆっくり膝をついて花道に倒れる)

田口 肉体市場と呼ばれる闇のブローカーを探し当て、それが、秘かに買われて行ったのを知ったのは二年前の秋だった。その家の窓辺に立って、君らがはしやぐ声を聞き、これでいいんだと背中を向けると、窓から転がった作りもののリンゴ、それを僕は手に取った。「それ、うちのだ」と駆けつけた君に、僕がソツと手渡すと、「これ、幸せのリンゴと言うんです」と君が言ったの、憶えていますか？

くるみ (手を掴み) 憶えてる、憶えてるよお！

田口 それから一年、去年の夏に、もう覗くまいと思ったあなたの家に、僕はまた足を向けました。うだる暑さにどの家も窓を開けてはいましたが、その家だけは雨戸を閉めて、古ぼけたすだれも破れていました。

くるみ あの時はいなかった。もうあたしいなかったんです。(と膝をつく)

田口 近所の人に聞きました。一緒に暮らしていた人が亡くなったのに、まだ生きてるような気がする、あなたがリンゴを抱いて家を出たのを。

くるみ そうですか。

田口 そして半年、あなたが何かを追うように、僕もあなたを探していました。見つけたのはあの町内。寺山さんがいた路地にあなとも何故か立っていました。僕は本当は寺山さんを追って来たのじゃないんです。あなたを追って来たんです。秘書として入社しやすいように、あのサンダル探偵社、出て来る路地で待ち構え、遂に仕事を頼まれました。しかし、あの目が、いつか、僕も知ら

ない力を發揮して、ジャガーの眼と呼ばれるに至ったのは、夢々、
知りはしなかったのです！

くるみ 上司！

田口 部下！

くるみ しんいちさんは？

しんいち 僕は……。

くるみ 言つて。

しんいち 善福寺川の雲になります！

扉 野郎っ、大同団結しやがったな。

少年 僕は、死んだチロの心臓になる。

くるみ うん。(と、少年の頭を抱える)

田口 (扉達に) 分かったか、これで、僕にも所有権のある事が！

くるみ 上司、リングは？

田口 ここですつ。

くるみ じゃあ、これから、何処に向かうか、ジャガーの眼の持ち

主に決めさせよう！(しんいちに渡す)

しんいち (受け取り) その前に、ジョーカーと呼ばれたこの目の

傷が何だか教えて下さい。

くるみ それは。

しんいち これは？

くるみ 手傷を負ったジャガーの傷よ。

この時、リングを持ったしんいちを呼び止める者がいる。

夏子 しんいちさん、(と、標本の上手寄りの棚横に隠れていた姿

を見せ)あたしも変わるわ。

皆、そう言って前に出て来た夏子の右手にメスがあるのを見
見る。

夏子 ミヨちゃんに。だって、あんたは、牛乳びんで手を切ったミ
ヨちゃんが好きなんだから。(そう言って、拳が見えない程、ダ
ラリと垂れた左手のシャツの上から、手首に向かってメスを当て
る)そして、こんなミヨちゃんを見せたら、こっちにだって青春
がある事を分かってくれるでしょつ。

しんいち 夏子お。(と、飛び込み、メスを持った手を掴む)

夏子 止めるの? 止めんなら、そんなリングは捨ててつ。

しんいち ——。

夏子 そんな他人のリングなどつ。

しんいち 捨てたら……。(手首を切るのをやめるかの意気込み
で)

夏子 捨てて後で捨うつつもりも駄目よ。

くるみ (身じろぐ)

しんいち ……。

夏子 捨てられないのね。

くるみ 捨ててっ!(と、しんいちの手の下で両手を広げて受けよ
うと構える。血を見た後のしんいちの胸騒ぎを予感して)

夏子 その女に拾わすのも駄目。

くるみ (構えた手を解く)

夏子 持っていていいわ。捨てる勇気など確かめないから。只、あた

しのやる事に目をつぶってほしいの。これからあたしはあんと暮らす。そのリングを持ってても、あんと一緒に暮らすつもりよ。そしてあんたの心が善福寺川の雲に、思いをばせようと、抱いたリングはゆっくりと、こうして、あたしの気持ちで、形なく、いつか焼けこげてゆくのを黙ってて欲しいの。

そう言つて、垂れた左手の袖の下から、左手に掴んだガラス（フラスコ）の泡立つ液体を、抱えたリングの上にとり垂らす。こげるように見えるリング。

しんいち

くるみ

夏子 甘酒よ。苦い、苦いあたしの甘酒。（さらになげようとする）

くるみ （耐えられないでその左手を掴み上げる）

夏子 他人のリングは苦くとも、あんたには甘い甘酒飲ますから。

（と、取られまいと差し上げたフラスコをくるみの手を絡ませたまま下に勢いついて下ろす）

あふれた液体が、しんいちの右目に飛び散り、かすめる。

しんいち、転がり回る。

くるみ しんいちさんっ、しんいちさんっ。（と、抱き起こす）

夏子

しんいち ジャガーの眼が……。

夏子 あんたを傷つけた訳じゃないわ。その体の一部を傷つけたのよ。(と、言いながら、おびえる)

くるみ 何が一部で、何が全部なの！(泣きそうになる)

Dr. 弁 肉体の一部を追う者はなく、まして、追われようとする一部などない。アイバンク、第六条。(つかつかと) 見ようか？

しんいち 見せたくないです。ここには縁のないジャガーの眼だから。

くるみ へこたれるな、ジャガーの眼！

しんいち くるみさん、シンジさんの前の奥さんだったくるみさん。

くるみ ここだよ。

しんいち どうして、しんいちと呼んだんですか。

くるみ 今はあなたの目じゃないか。

しんいち それから、ひとつ気になる事を聞かせて下さい。その口ケットは持って来たけど、持って来てない。拾ったけど拾ってないとはどういう事です。それがどうしてバクチに勝ったと言えるんですか。

くるみ (ロケットを外してフタ開ける) っらん。ここには今は誰もいない。この中にはめといた写真は捨てたんだ。いつか……。

しんいち いつか？

くるみ これから、その目が宿る三人目の人の写真を入れる為。それはあんたよつ。

しんいち それじゃ、何が何でもこの目を治さなきゃ。(と、右目を押さえて立ち上がる) 行きましよう、去年の雲が浮かぶ善福寺川の上流の、僕しか知らない病院へ。

くるみ ジャガーの眼が、そこで生き返るなら……。

しんいち 屋上には、取り込まれるのを見た事がないシートが、いつも旗のようにはためき、中からはコーラスの歌も聞こえ、狼の落日と呼ぶ真赤な夕陽がさしかかる――。

くるみ そこだっ、その日の寝ぐらは！

しんいち (つまづく)

くるみ (抱える、肩を入れ)

〴〵私は見えていた

その赤いかたまりを

まるで昇りきらず

郊外の家並にかかる

太陽のように(と、ドアから外へ)

少年 (それを見ている)

サラマンダ (花道から、起き上がり、田口に向かう)

くるみ 〴〵そんな家の一軒で

あなたは生きて

サラマンダ (田口を抱きしめる)

くるみ 〴〵生きて暮していた(と去る)

少年 (サラマンダに抱かれた義眼の田口をゆさぶる) おじさん、

ジャガーの眼に遅れるよ！ おじさん、おじさん、おじさん、お

じさん、おじさあん！

音楽。ドアが全てを隠す。観客の目を遮断するように、暗転。そして、音楽が去りかかった頃、くるみを手の中で擦る音が聞こえて来る。ゆっくり、明るくなっても、七枚のドアはそのままだが、下手の二枚が下手に去ると、そこに

車椅子にサラマンダを座らせた田口が立っている。(これは人形と共に歩いた田口を物語る)

田口 二人が訪ねたその病院、それはいつか、寺山修司がノックした無人の病院だった。屋上のシートは風に引き裂かれ、コーラスの声などはなかった。只、朽ちたビルにさしかかる夕陽が、悲痛な狼の叫びを残して、刻々と夜の中に紛れていった。その病院の瓦礫の中に舞い込んだしんいちを使者は、心もとない気持ちで、長いこと見送っていたが、夜もとつぷり暮れると、棚の影もしんいちの姿も分からなくなった。使者は、しんいちと呼び、ある時はジャガーと金切り声をあげて呼び戻そうとしたが、戻って来るしんいちの姿はなかった。そして、使者は、彼が、幻の病院の奥へ、その目を癒す為に入ってしまったのではない事を知った。潰されたジャガーの眼を持った何でもない只の青年が、戻る価値もなく、姿をくりました事に気がついた。

残ったドア去る。そこは、あの路地のある町内。真ん中の家の窓だけが外れ、チャブ台の上の電気が、じんじろべえのような傘を広げて止まっている。そして、くるみを拳の中で擦り合わせるくるみが、家の外の、ゴミ入れの横でうずくまり、いつか、そこに帰るしんいちを待っている。

田口 これが調書です、依頼人。

くるみ (立ち上がり、窓の中を覗く)

田口 そうして十日、はっきりなく家の中を覗くあなたも書き添え

ねばならないんですか？

くるみ (ゴミ箱の上に立って辺りを見る)

田口 この家には明日、別の人が入って来るんです。

くるみ (爪先立った為に引っくり返る)

田口 ゆきましよう。

くるみ (うなづく)

田口 あの目がなくても、この僕のもう一つの目があるじゃないですか。

くるみ (ボンヤリと見上げる)

田口 行くんです、部下。

くるみ でも。

田口 何です。

くるみ あの病院で、最後にあの人が言った事が何だったのか思い出せない……。

田口 あなただけが、呼んでいたんじゃないんですか。

くるみ 梁が倒れて来た時、崩れるレンガの響きの中で、何か、何か言ったような気がするんだ。

田口 (振り返る)

路地に一人の男が立って、タバコを吹かす。中年の他人だ。去る。

くるみ (虚しく、見ながら、くるみを擦る)

田口 (腕を取り) さあ、裏切りの風に体が冷えます。

くるみ うん。(フラッと立つ)

路地に又別の男が立つ。煙草をシュバツと。

くるみ (見ずに聞く) 誰？

田口 (見る)

くるみ ねえ、どんな恰好してる？

田口 シヤツ姿の。

くるみ 上着を脱いだんじゃなく？

田口 他人です。

くるみ 立つのも他人？

田口 それも去ります。

くるみ でも、その後の、あの音は？

田口 路地を飛ぶ木の葉です。

くるみ じゃ、この町内ともお別れね。

田口 さよならを言う事はありません。初めからさよならを告げら

れた町なんですから。

くるみ でも、サぐらいは言わせて。この町の、あの家にこの命を

つなぎ止めた町なんだから。サ。

田口 それでいいでしょ。

くるみ ヨ。

田口

くるみ ナ。

田口 ナまで言うんですか！

くるみ (うずくまり) ラも！

この時だ！コロコロッと反対側の路地から、リンゴが転がって来るのか。

くるみ （目の前に来たそれを見る）！ 思い出した！ 思い出し

たあ！

田口 ？

くるみ これです。（と、リンゴを掴む）このリンゴが、帰る時、

この幸せと不幸せの路上を、ある日、リンゴが、こうして戻る

時！ あの目を治して、あのジャガーの眼を治して、きつと帰る

と言ったんだ！ 倒れて来た梁、崩れるレンガの中で、三度生

きるジャガーの眼の持ち主が、あたしにそう告げたんだ！ そこ

だね、その路地にいるんだね、ジャガーの眼！

その路地からフラッと立つしんいちの影。汚れた包帯でその右目を斜めに隠している。

くるみ きつと来ると思っていたよ、ジャガーの眼！

リンゴを落とすと割れ、ランプの願いの煙がたち込める。その中で、ぼんやりとした二人の影が、煙に包まれ、近づき、一人は包帯をゆつくりとあげ、一人は覗き込む。田口、車椅子を押すと、サラマンダの首がゴロリと前に落ちて砕ける。確かめ合っている目と目。煙に包まれ。サンダル会社を引っぱって少年、飛び出る。

少年 おじさんっ、チロの体も、このサンダルも、何だか、温かくなつて来た！

田口（見る）

すかさず、七枚の戸が、客の視線を遮断する。音楽。並べられた戸の真ん中、目のような二つの亀裂が出来ていて、そこから、ジャガーの眼の光かと思う明かりが、逆光で顧客を射抜く。音楽。風吹き、その戸も舞つて転がり去る。と、煙は消えて、舞台に人無く、路地を抜けて行った人を見せずに家並があるだけ。それも崩壊の音で、路地を中心に、家々が左右に引き、崩れると、路地を抜けて向こうに去ったサンダル会社とくるみと田口としんいち、少年が見える。サンダル会社を押しながら、それさえも去って見えなくなる。